
24時間営業中！

あずまひとみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

24時間営業中！

【Nコード】

N8553I

【作者名】

あずまひとみ

【あらすじ】

深山京介、大学3年生。コンビニでバイト中。目の前には知らない女。

…一万円で俺を売って、アホか。

第1話 コンビニで人は売ってません。（前書き）

お久しぶりです、な方も初めまして、な方もコンニチハ。あずまひとみです（・ ・ ）前作から随分と時間がたつてしまい、申し訳ないです。

今回は長めな連載になる予定ですが、よろしければどうぞおつき合ってください。ほのぼのが読みたい！という声もあり、所々に気の抜けるエピソードを入れてゆく予定ですが、前作の猫とか変態とかが出てくる話に比べたら、ほのぼの指数は少ないかも知れないです（つ、）まあ、あの話は私の中でむしろテーマ自体がどっぷりほのぼのでしたから…（笑）

何はともあれ、楽しんでいただければ幸いです♪

第1話 コンビニで人は売ってません。

京介はその日も決められたシフト通り、いつもと変わらずバイトにでているだけだった。

なのにどうして、こんな変な客に絡まれているのだろう。

自分は何か悪いことでもしたのだろうか。

——思わず、頭を抱えなくなった。

「ありがとうございます、またお越しくださいます。」

少しでも距離の開いたとなりのレジでは、同期のバイト仲間が最後の客の会計を終えたところだった。

俺だって早くレジ終わらせたい…！

その一心で、目の前に立ちふさがっている少女に目をやる。

年の頃は…京介がパツと見た感じ、高校生、といったところだろうか。

白いニットの帽子に、ブラウンのダウンを着ている。

胸元までストレートの茶髪が降りていて、くりくりとした大きな目は本来なら可愛い印象を与えるはずなのに、きつくこちらを睨みつけていた。

差し出されている細い手には、一万円。

「ですから…なんと言われたって無理なんですってば。」

「どうして？ コンビニは24時間なんでも売ってます、ていうのがウリなんじゃないの。」

だからってな…、

京介は天を仰ぐ。

人を売ってくれなんて頼み、きけるわけねえだろが！

「あのですね、さっきから言ってるように俺は売り物じゃないですから。遊び相手ほしさとかならどつか別の…」

「やだ。遊び相手ほしさとかじゃないもの。」

そう呟くと、彼女は目を伏せる。

客足が引いた静かなコンビニに、静寂が落ちた。

一万で人を買おうだなんて、おかしいにもほどがある。しかも夜中のコンビニで。

そう思うのが正しいはずなのに、京介はなぜだか一瞬、自分が悪いことをしたようなきもちになった。

それでもこれは…譲っちゃいけないところだと思っから、沈黙を守る。

しばらく両者頑として動かなかったが、しびれを切らしたのか、少女の方が先に口を開いた。

「どうしても、だめ？」

「どうしても、だめです」

「500万、用意するって言っても？」

「あたりま…500万!？」

どこからそんな大金持ってくるんだよ!

「き…金額の問題じゃないでしょうが!要は現代日本じゃ人身売買は禁止されてるって話で」

「そーゆー問題でもないでしょが」

後ろを通った同僚がぼそつと呟いてゆく。

無責任にも、そのままバックルームに消えていった。

「…とにかく!無理なものは無理なんです、お引き取りください」
本日何回目かのセリフである。

すると少女は「…ケチ男!」と吐き捨てて、やっこのことでコンビニを出て行ったのだった。

第2話 酔いどれな姉

京介がバックルームに引き上げると、一足先に退勤していた同僚が着替えている最中だった。

黒縁めがねがトレードマークの彼は、おとなしく真面目そうな印象を与えていながら、はつきりな物言いをする人物である。

その同期——小澤遼は、視線を一瞬あわせた後、静かにこう言った。

「おつかれ。さっきの子——彼女？」

…京介はあまりに予想に反した言葉だったので、思わず声を失った。

頭の中で二回、セリフを反芻^{はんすう}してみる。

カノジヨ…カ、カノジヨ…。

「そつ——んなわけあるか！！だれがあんな非常識なやつ」

「そつ？それにしては会話のテンポがよかったから。とても初対面には見えなかった」

淡々と言う遼に、京介はまたもや絶句である。

「あ…ありえないだろ」

「ありえないの？」

「ありえねーよ！」

遼は、一瞬視線をあらぬ方向へ向けた。

「大変そうだね。深山^{みやま}いつも怒鳴って疲れない？」

「~~~~~っ、」

京介はまた怒鳴りそうになるのを、ごくんと空気ごと飲み込んだ。

——おまえも要因のひとつだっつーの！！

家への帰路を辿りながら、京介は深いため息を吐いた。

吐いた息が白くて、思わず何度か吐いて吸ってを繰り返す。

なんだかやたら疲れた気がして、気分転換にでもと歩きながら冬になりかけの夜空を仰いだ。

——あ、オリオン座。

……まあ、オリオン座しか分からないのだけれど。

それでも、360度満点の星空は、やっぱり慰めというか…癒しにはなる。

星がちりばめられた空を見ながら、なんとなく今日来たおかしな客を思い出した京介は、また明日も来たらどう対処しよう、なんて思った。

——少しばかり考えてみて…今日もう考えないことにした。考えたらきつと、めんどくさいことになるから。

「ただいま…、！？」

姉と二人暮らしをしているアパートに着いた京介は、扉を開けると固まった。

——一体なんなのだ、この惨状は。

…お情けのような広さの玄関には、ヒールの高いブーツが転がっている。

居間までの短いフローリングの廊下には、脱いでそのまま散らかしたような洋服が、散乱。

次いで、恐る恐る居間に足を踏み入れると——そこには、ソファーにぐでつと寝ている姉、美歌の姿があった。

見た感じ、酔っている。

い……一体何があったんだよ。

恐怖政治に近い形で上下関係ができているこの深山兄弟では、弟が寝ている姉を起こすなど、考えられないことだった。

その上、綺麗好きな姉がここまで部屋を汚くするのも、ありえないことだった。

従って——何かそれほどのことがあったに違いない。

そう考えた京介は、一つの結論をはじき出した。

………触らぬ神に、たたリなし。

そうと決まればさつさと引き上げよう、と素早く踵きびすを返す。

しかしその瞬間、床に転がっていたマスカラ——おそらく、いや絶対美歌のものだ——を踏んでしまった彼は、そのまま盛大に転んだ。

ドタツ、と派手な音がたつ。

や……やっべえええ！！今ので絶対起こした。殺される。制裁される……。

息をつめて後ろのソファーを振り返れば——。

「んー……京介え……？」

耳に届くのは、悪魔の声だ。

京介は、美歌に首を絞められる自分が頭に浮かんだまま、動かずに——いや、動けずにいた——。

第3話 舞い込んだ朗報

「あんだ…床に座り込んでなにやってんの？」

「……………いや、なにも？」

てめえのマスクラが転がってたんだよ！片付けろよ！

——とは思っても、実際のところてめえのての字も言えないのが、京介が京介たる所以である。

ああどうか…痛いことだけはされませんように、と心中祈る。

ふうん…とつぶやいた姉は、なにを考えているのか、あるいは何も考えていないのか。

…数秒京介の顔を見つめ、それから「うつふふう…」と笑った。

「…え」

ソファーの上からうつぶせのままで、頬杖をついてこちらを上機嫌に見つめている美歌は、はっきり言って気持ち悪い。

——京介は座ったまま、後ろに後ずさる。

——美歌は笑ったまま、立ち上がる。

まずい、と思ったときには遅かった。

次の瞬間姉——美歌は、京介に向かって飛びかかっていたのだ。「うわっ」

ドスン、と美歌の体重——推定51キロ——が、京介の体にのしかかる。

「京介え」

「なんだよ…酒くさっ」

「なによーいいじゃないたまには。せつかくいい気分なんだからさあ」

「いい気分ってどうしたんだよ。姉ちゃんが酒飲むなんてめずらしい」

とりあえず、不機嫌ゆえのアルコールではなかったことにほっとする。

「あのねえ、私結婚するから」

「……はい？」

「だからあー、結婚するの。プロポーズされちゃった」

そう言う姉は、終始ニコニコと笑っている。

プロポーズって……。

「あの、3年付き合ってる彼氏!？」

「そーそー。今日、珍しくあのポケポケ男がちゃんとした店に予約してるもんだから、それだけでもびっくりしてたんだけどねー。ご飯食べてる最中にいきなりね。思わずどつきり?って聞き返しちゃうたもん」

——それもそれでひどい返しではないかと、京介は思う。

「それでべろんべろんなわけ？」

「それでべろんべろんなわけ」

未だ自分の上から退かない美歌を呆れた思いで見ながら、それでも京介はほっとした。

よかった……こんな凶暴な女の引き取り手があつて。

大体にして、自分は昔から姉に使われすぎなのだ。肩を揉め、だのジューズ持ってこい、だのオマエにチャネル権はない、だの。

ほんのちよつと遅く生まれたからって、なぜここまで下僕扱いされなければならぬ。

幼少時からそんな不満を抱いていた京介は、ようやくこの姉の呪縛から逃れられそうなことに、心底嬉しくなる。

もちろん姉の結婚自体も嬉しいのだが、その大きさははるかに下僕から解放されたことの方が勝っていた。

「で……これからどうすんの」

「んふふー、とりあえずねえー、私はここ出て彼氏の家に行くから。京介、あんた一人でここ使いなさい」

「……へ」

「あんた前から一人暮らししたがってたじゃん。いい機会でしょ？」

…元々、なぜ21歳の京介が26歳の姉と二人暮らしをしていたか
というと、今の大学に通うためだった。

実家から離れているものだから通学なんてできず、当時すでにこ
っちで働いて一人暮らししていた姉を頼ったのだ。

「そりゃ嬉しいけど。父さんと母さんには言った？」

「まだ。どーせあいつは親ウケいーんだし大丈夫っしょ。ってこと
で私寝るわ。テーブル片づけといて」

「は!?!」

思わず叫んだ。

…話は理解したが、なぜ自分がテーブルを片づけることになるの
か、その論理展開が分からない。

「い、異議あり!?!」

「却下」

「なんでだよ!待った!」

「待たない。寝る」

「姉ちゃん!」

「何よ」

「け…、結婚おめでとう」

「……………」

てつきり文句を言われるとばかり思っていた美歌は、不覚にも一
緒きよんとする。

見れば、弟は気恥ずかしそうに目を伏せていた。

——これだから京介って、いじりたくなるのよね。

近くによつて、頭をグシャグシャとなでくりまわして。

「なにすんだよっ」

「…ありがとう」

美歌は、めったに見せないやさしい笑顔でそう言った。

「……………おう」

「それからね、京介」

「ん?」

——だから京介は、油断していた。

「寝てるお姉さまを起こすんじゃないねえ!!」

はっ、と思ったその時には、頭頂部にげんこつが落ちていて。
「いってえ!!」

……………そう。

深山美歌とは、こういう人間だった。

第4話 後輩の噂

「どうしたんですか、先輩。やけに嬉しそうじゃないですか」
何かいいことでも？

週明けの月曜日。

久しぶりに赴いたサークルで、京介は後輩にそんなことを指摘された。

ちなみになんのサークルかと言えば、『love 本サークル』
というなんとも安直な名前をした、本をこよなく愛するもの達が集うサークルである。

そんなサークルに入っている以上、もちろん京介も本好きだった。サークル室の中に鎮座している本棚の中から、今日は何を読もうかと物色中に声をかけられ、尋ねられたのが今のこと。

俺はそんなに顔に出てるのか？と一瞬羞恥心がわく京介だが、そんなことはお構いなしに後輩の女子はしっかり答えを待っていた。

「あー…。一人暮らしできることになりそうで」

「え、本当ですか？よかったじゃないですか」

以前からことあるごとに一人暮らししたい、と呟いていた京介の切望ぶりは、どうやら周囲の人間から見ても分かりやすかったらしい。

「うん、だから嬉しくてさ」

「じゃあこれからはお姉さんの下僕生活からも解消ですねー」

「…お、おう」

……どうやら、美歌の女王さまぶりも。

「そういえば先輩、過去問貸してくださいよ」

本を選び終えた京介に、ソファに座った後輩がいきなりそう猫なで声をあげる。そういえば前から貸す約束だったな、と思い当たって京介は家の果たしてドコにしまったのか、思い出そうと必死になった。

「いいけど……ちょっと待て。俺過去問ドコにしまったっけ」

「ええ、しっかりしてくださいよ。先輩の過去問があたしの大学生活を支えてるんだから」

「分かるけど自分で支えろよそこは」

「いやです。使えるものは使いまーす」

ついにはソファーに寝そべってしまう後輩に、京介は諦めのため息をつく。

先輩の過去問がないとやってけないってのは分かる。分かるけど、こいつこの先過去問題ない教科はいつたいどーする気だよ……。

よりいっそう後輩の未来が心配になった、その時。

「こんにちはーっ。まみ来てる？」

勢いよくサークル室に入ってきたのは、この後輩と同級の、一年生だ。

「一ノ瀬」

「あ、深山さん。おつかれさまでーっす」

元気良く部屋に入ってきた彼女——一ノ瀬は、京介に挨拶するとすぐに「まみ」こと「過去問貸してください女子」のところへ走り寄っていく。

「ねえねえまみ、見た？」

「へ？なにが？」

唐突な質問に、まみが一瞬きよんとした。

一方、サークル室の中央に陣取るテーブルと、セットで4つあるうちの1つのイスに座った京介は、本を開きながら背中に後輩の会話を聞く。

「ああじゃあ、やっぱり見てないんだ」

「……？」

要領を得ない、というまみの顔。

「今日ね、来たんだってさ」

「だからなにが？」

「なにが、じゃなくて、和泉が」

「え…和泉って、あの和泉？」

「そうだよーん。ここ3ヶ月、ずっと学校来てなかったじゃん」

へえ、今の一年にはそんな奴いるのか、と京介は盗み聞いた。

そういえば自分が一年のときにも、冬にやめた奴がいたな。

そんなことを思い出して、今やもう3年の自分を誉め称えなくなる。

3年続けてる俺って、結構すげー。

「和泉、学校やめるって噂あったじゃん。やっぱあれデマ？」

「来たってことはそうなんじゃない？…むしろ今日最後の退学届け出しにきたとか！？」

「ああー。それ、ありえる。せつかく和泉成績いいのに、なんかもつたいないよねそうなる」と

その和泉、とかいう本人を抜きにしてどんどんヒートアップする二人の話に、まさかその本人はこんなに噂されてるなんて思ってたんだろな、と京介は一人ごちた。

ていうか、いつまでも盗み聞きしてるのどうよ。

そう思い直して、本に意識を集中しようとして――。

「あつ」

上着のポケットに入れていた携帯の、バイブレーションが鳴ったことに気づいた。

現在時刻は午後4:30。

…いやな時間。

一縷の望みいちろをかけて、表示を見ずに通話ボタンを押すも。

「…も、もしもし」

「もしもし、深山？僕、遼」

ああ、やっぱな。

「…おかけになった番号は、現在使われておりません」

とか、言ってみたり。

『君、馬鹿？最初のもしもしはドコの誰』

相変わらずな遼の受け答えに、ガックリ肩を落とす。

「…なに、今日シフトの奴、出られなくなつた？」

『分かつてるならあと30分でよろしく。』

僕一人で勤務なんて、絶対無理だからね。

最後に一言そう残して、バイト仲間の遼は電話を切つたのだつた。

仕方ないので、帰り支度を始める。

「あれ、先輩帰るんですか？」

まみが気づいて声をあげた。

つられて後から入ってきた後輩——一ノ瀬も、帰るんですかと復唱する。

「たつた今バイトに呼ばれた。今日出る予定だつた奴、無理になつたんだつて」

「せっかく休みだからつて本読みに来たのに、ドンマイですね先輩」
全然ドンマイっていう気持ち込めてないだろ、オマエ。

「借りて読むから」

一言言い置いて、バイトへ向かう京介だつた。

「おはようございまーす。遼、出勤押してくれたりした？」

「おはようございます。うん、押した」

「さんきゅ」

着くなり聞くと、出勤はされているということなので、急いで着替えることにする。

先に行つてるよ、という遼の声を背中に聞きながら、京介はわたしとユニフォームを取り出した。

「いらつしゃいませこんばんはー…」

焦り気味にバックルームを出て、とりあえずレジに向かう。

今日は人、少ないな。

ざっと店内を見回して、今日、これからの人の入りを予想した。

2年以上もやってれば、大体あたるのだ。

…こつこつ日にこそ、なーんかめんどくさいトラブル起こるんだよなあ。

あまり当たってほしくない予想をたてて——後にこんな予想たてなきゃ良かった、と後悔することになるのを、京介はまだ分かっていなかった。

第5話 二度目の出会い

——それは、自分の勤務時間があと30分もすれば終わる、という夜も回って午後9時30分頃のことだった。

「深山、なんか外うるさくない？」

遼の声に外を見やれば、コンビニの駐車場の角で、騒いでいる若者集団らしきものがうかがえた。

「どーせ、酒入った学生だろ？」

それが二ト。

京介はああいうのは相手しちゃだめだ、と知らん顔を通そうとする。

「でも様子が尋常じゃないんだけど」

「尋常じゃない？」

眉根を寄せた。

尋常じゃないってどういうことだ。

何かあって店に損害があったら困るので、様子を見ようと外に出ることにする。

あーもう、なんでこんなめんどくさいこと。あれか？最初あんな予想たてたからか？

心中、出勤時の予想を後悔しながら出入口に向かう。

誰か一人は売場にいないてはならないため、遼は留守番だ。

「ちよつと見てくる」

「うん」

一枚目の押し戸を開けて、二枚目の引き戸を開ける。

少しだけ雪の混じった夜風が、冷たく頬を撫でた。

「たく……あと少しで上がりだつてのにお願いだから面倒おこすんじゃないぞ。特になにもなかったらすぐに店に引き返そう、冬だし寒い。」

そう考えて集団に向かって歩いたが——次の瞬間、その集団が

ら聞こえてきた声が、それを許さなかった。

「だから行かないつつてんでしょ！あんたたち耳ついてないの、耳……」

この声――、

「ほんつと顔はそれなりに可愛いくせに可愛げねえな、この女」

「一発殴ったら？」

「ばっか一発殴ったら可愛い顔が可愛くなくなんだろ」

「あそつか」

そこにいたのは、少なくとも集団ではなかった。

若い男が二人、一人の女の子を取り囲んでなにやら絡んでいる。

大方、ナンパでもして振られたのだろうが。

絡まれていたのは――京介の予想どおり、あの時の京介を買おうとした女の子だった。

少しだけハスキーで、でも声優みtainなアニメ声。

店には来ないと思ったたら一体こんなところで何やってんだ？

一瞬考えたところで――今はそこを考えてる場合じゃないだろう、俺。

「あのー、すみません」

まだなにやら騒いでいる男に、後ろから声をかけた。

「ああ？邪魔すんじゃないよ」

「……あ――」

京介に気づいた彼女が、目を瞋る。

それに気づいたけれど、とりあえずはこのうるさい八工を片付けることに専念した。

「そうは言われてもこっちとしては店先で騒がれると、他のお客様にご迷惑なんですが」

「だからなんだよ」

うつわめんどくさいの来た。

「営業妨害で警察に電話しますよ？というよりここを出てくる前にもう電話して来たんですけど」

「なっ……」

もちろんハツタリだが、ハエ二人の表情はまずい、というものに変わった。

「お客様から苦情が来てたもので」

「……………」

男が黙る。

「俺警察はやだよ、行こう」

先程から京介と角突き合わせている男より小柄なもう一人の男が、そう言った。

以前お世話になったことがあるのか、凶暴そうな男の方も苦虫を噛み潰したような顔をする。

二人は一旦目を合わせると、ちっと舌打ちをして意外とあっさり引き下がるのだった。

遠ざかる背中を見送って、ついで傍らの『一万円』少女に視線をうつす。

「——大丈夫かよ。一体何やってんだ」

縮こまって押し黙る彼女に、京介はそう声をかけた。とりあえず彼女に外傷はなさそうなことに、ほっとする。

……そこまで思考をめぐらせて、俺はいつのまに客と店員の線引きなくしてタメ口使ってたんだ、とハツとした。

けれども覆水盆に帰らずで、今さら気づいてももう言った言葉は取り消せない。

「……………あー……」

ガシガシ、と頭を無意識に掻く。

「すみません、えーと」

「……………のんでないじゃない」

「はい？」

「助けてなんて、頼んでないじゃない！あたしに買われる気がないんならかまわないでよー！」

……………は、

はあ！？

なんだ、それは。一応助けたのに、理不尽ではないか。
そんな思いで口を開こうとした京介だが――。

「深山！！」

「！」

10メートルくらい離れた向こう側から、遼が刺々しい口調で自分を呼んでいるのが見えた。

「いつまで様子見してるんだよ！込みそうだから戻ってきて」

「~~~~~」

自分が店員をやっている以上仕方ない。

とにかく店に戻らなければと踵かかひすを返す。

頭にはきていたけれど、またこの女は絡まれかねない、と京介は思い当たり、もう一度口上で注意しようと振り向いた。

――どうせ、怒ってる顔してんだろうな、と思いながら振り向いて――今度は京介が、目を瞠もった。

「――」

……泣きそうな、顔をしていた。

だけど、泣かないと決めているように彼女は必死に我慢していた。京介に見られていることに気づいているのかいないのかは分からないけれど、俯いて、唇を噛みしめていた。

なんだよ、なんでそんな表情してんだよ。

かけようとしていた言葉がかけられなくて、京介はフリーズする。

なのにここからさっさと立ち去ることはできなくて、二人の間には沈黙が落ちた。

すぐ近くを通っているはずの自動車の騒音も、どこか遠くから聞こえている気がして――。

「深山！！！！」

「わっ」

ビク、と体が揺れた。

遼の声にはいい加減苛立ちが紛れてい

る。

……そういえば戻ろうとしてたんだ。

京介は彼女の肩を一度だけポンと叩いて、店に走って戻るのだった。

第6話 境界線

店に戻って人がいなくなるまでレジをやって、まだ終わっていないかった仕事を手早く片付けて、夜勤の人に軽く引き継ぎをして。それから京介と遼はやつと退勤をした。

京介はすぐさま近くにあった椅子に腰掛けて、それから背伸びをする。遼はその向かいに座って、制服を脱いでいた。

「あーなんつか妙に疲れた。…てか店長…人増やしてくれよ…平日に二人はどう考えてもきついだろ…」

店長が聞いていたら「はははーそんなこと言って君たち二人でもできてるだろう」と言われそうな、けれども実際に働いている京介と遼にとっては切実な呟きが思わず口をつく。

「まあ、確かにきついよね。やれないことはないけどいざというとき対処できないことがありすぎる」

遼の言葉に、京介はここぞとばかりに賛同した。

「だよな。両方のレジに3人ずつ並んだときに電話がなったり」

「そういう時に限ってコピーの仕方分からないから代わりにやって人がいたり」

「ATMの使い方が分からないって言われたり」

「300円を一円玉300枚で出してきたり」

「FAX壊しちゃう人がいたり」

「自分で動きたくないからって全部僕達に商品持ってこさせる人がいたり」

「トイレの貯水タンクにエロ本突っ込んでトイレつまりらせる奴いたり」

「買った栄養ドリンクその場で飲んでカウンターに捨てていてってゴミ置いてく人いたり」

「……………」

「……………」

そこで二人は一瞬顔を見合わせた。

「なんか最後の方…もう忙しさ関係なかったな」

「そうだね。これじゃただのお客様に対する愚痴だ」

ぷつ、と噴き出して二人は笑う。

ほんとに、世の中にはいろいろな人がいるものだ。

——それから他愛ない話をして、制服も名札もすべて片付けて、あとはもう帰ればいいだけ、となった段のことである。

遼がおもむろに、そういえばさ、と口を開いた。

「あの、9時半くらいの外での一悶着。深山一緒にいたのあの時の女の子じゃなかった？」

京介は口をつぐむ。見てなかったふうに見せかけてちゃんと分かっ
ってんじゃねーかよ。

「ああまあ…そうだけど」

「やつぱり。どうりで戻りが遅いと思ってた」

「どうりでつてなんだ！」

京介としては異を唱えたい。たった2回会っただけの女子、それも1回目は『1万円で売れ売らない』の押し問答をしただけの客だ。どこに「どうりで」な要素を見つけたのだと言っのだろう。

仏頂面で遼を見返すと、分かってないの？という目線を寄越された。

「深山、あの子のことすごく気にしてるじゃん。店に来なかった間、出入口気にしてるのバレバレ。さっきだって店に戻るよりまだ傍にいたかった、みたいな反応だったし」

一息で言われて、京介が息を呑んだ。俺…そんな態度とってたか？

「とってたよ」

「心読むなよ…」

「いやなんとなく分かつて」

京介は肩を落とす。

……………こいつほんと怖い。

「もし本当にそんな態度だったんなら——あのまま帰したら、ま

た絡まれそうな気がして心配だったただだよ」

息についてアウターを羽織る。

「ふーん……」

京介がこの動作をした時は帰るといふ合図であることを分かっている遠は、これ以上話はのばさない。

「じゃ、おつかれー」

バックルームを出ていく京介に「お疲れさま、また明日」ところも返しながらその背を見送る。

京介は今「また絡まれそうで心配だから」と言っていたが。

——店に来てない間出入口を気にしてる時点では、あの子が絡まれる事件なんて起こりもしてないんだけどな。

……おそらくそれも、本人は気づいていないのだろう。

あーっ、たくあの女のせいで無駄に疲れたわ。

京介はアウターのポケットに両手をつ込んで夜道を歩きながら、先程の一万円少女との会話を思い出していた。

——『あたしに買われる気がないんらかまわないですよ！』

一応助けてやったのになんであんなこと言われなきゃならない？俺がなんかしたのかよ。つかそもそも夜に女が一人で外歩いてんじゃねえっつの。

理不尽な想いが募って、自然足取りも速く、荒くなる。人助けしたのに損した気分になっているのが、納得できない。

次、店に来ても徹底的にビジネスライクに対応してやる——そう、思うのに。

常に頭に浮かぶのは、別れ際の泣きそうな顔で。

一体彼女は何を抱えているのだろ。何を我慢しているのだろ。そればかりが京介の思考を捕らえて離さない。

そのうえ、どこか漂う危なっかしさに、客と店員の線引きをいつ

の間にか消されている。

今日思わず口を突いて出たタメ口が、そのいい証拠だ。

京介は、無意識に止まっていた足に気づいて足を踏み出した。

シフトは明日も入ってる。わけ分かんないことに気をとられるよりも、仕事しなきゃな。

一応のところはそう結論づけて、思考を中断することにする。

——たとえば、自分の感情に沿わないことだったとしても。

第6話 境界線（後書き）

今回京介と遼が愚痴りあっているシーンがありますが、あれはすべて実際私がバイトしているコンビニで体験した実話です（笑）

第7話 始まり

——次の日もバイトだった京介は、今日も例に漏れずコンビニだ。

それでも今日はメンバー構成が3人の日で、昨日に比べればちょっとは楽ができるかな、と考える。

バックルームに入るともう遼と、3人目の同期バイト——昨日ドタキャンして京介を出勤に追いやった男だ——も出勤していた。「よーっす深山。昨日はごめんな」

「おー、新谷^{にいや}。まあ別にいいけどまたデートか？」

「俺にそんなこと聞くななんて愚問でしょ」

ニコツと笑って色気を振りまくこの男、新谷という名の言ってしまえば生粋のタラシである。

持ち前の明るさと整った顔でモテるのだが、

「でも名前が太郎じゃね」

「小澤コノヤロウ！下の名前言うなって言ってんじゃねえか！」

「太郎、うるさい」

……名前がひどく可哀想だった。

この3人がコンビニの夕方勤務での同期であり、尚且つ今一番勤務歴が長い3人だ。

新谷も京介も、入った時から幾度となく遼の歯に衣きせない物言いに撃沈させられてきたが——ほんと小澤は相変わらずだな、とタラシ男が息をつく。しかも理路整然としているものだから、余計太刀打ちできない。

もちろん遼は、相手のそんな態度を歯牙にもかけていないのであるが、それでも憎めないから不思議だ。

「あーあ、女の子が一緒のシフトならこんな扱いされないのに」

新谷がぼやいた。夕方勤務のメンバーの中で、たった二人の女子の顔を思い出しながら言っているのが手に取るように分かり——

それほどまでに女子に囲まれたいのかおのれは。

京介がそう突っ込むより先に、遼が口を開いていた。

「残念ながら僕ら男だから、女の子の反応を期待されても困る」

遼、突っ込みポイントが違う！

「期待なんて。むしろ気持ち悪いでしょおまえらがそんな反応したつてさ。…ああ、せめて『あの子』が今日も店に来てくれたらヤル気出るのになー」

ぐでーつと背もたれに全体量をかけながら、なおも来ないかなー、来てほしいなー、と新谷がしつくく呟く。

「…あの子？」

遼の方は『あの子』に心当たりがあるようで、ああ、と相槌をうつているが、京介は、全くと言っていい程分からなかった。

…新谷太郎という男を考えてみる。

——こいつがヤル気を出す、イコール可愛い女子。

今日も店に来てくれたら、イコール準常連客。

………結果。

いたっけ？そんな客。

京介のそんな心中を表情から読み取ったのか、遼がフォローするように付け足した。

「深山も見たら分かるよ。絶対知ってるから」

「あ、ああ」

そう言われてしまえば、そうなのかとしか答えられない。しかしついその微妙な言い回しに、引っかけりを覚えてしまうのは人間の性か。

そもそもが普段このタラシ男とシフトが被ることがあまりないわけで、新谷のお気に入り客の情報なんて入るはずもない。

まあそれでも遼が見たら分かるって言ってんだし、べつに新谷のお気に入りか分からないところで俺の日常生活に支障はないし。

この時の京介はそう考えていたのだが——数時間後、その見解を180度転換することになる。

今日は人の出入りが少なく、それなのに3人——しかも全員ベテランの域だ——なものだから、正直やることなくないた。

この機会だからと、優先順位が低く普段全く手がつけられていない棚清掃をやろうと、京介は一度バックルームに戻り道具を取ってくる。

お菓子が陳列されている棚の前を陣取り、

「俺棚清掃してるから」

と声をかければ『了解』とユニゾンで返ってくる。

なんだかんだでチームワークはいいのが長所だ。

口ではめんどくさいを連発する新谷は実はマメで、今も全部の商品を見回りながら売れてデコボコになった商品の列を、全部前に出して回っている。

遼は、器用さが評価されて通年ポップづくりを頼まれており、カウターの隅で今もその作業をしていた。

3人が静かな、人のいないコンビニでそれぞれの仕事をしており、この時間はなかなか嫌いじゃない、と京介は思う。

もし——もし、今この時に昨日の事件が起こったなら、最後までついててやるのができたのに。今なら俺が抜けても2人で回せる。

そこまで思考が滞りなく巡って、だからなんで！と京介は自分に突っ込んだ。

なんで俺は最初の時といい、昨日といい、あの女のことをここまでする！『何かを抱えてそう』？『何かを我慢している』？だからなんだと言うのだ、自分には関係ない。所詮、自分と彼女は客と店員。紛れもなくただの他人なのだから——。

その時、ピンポン！と静寂を破り唐突にドアベルが鳴った。瞬時

に思考が引き戻される。少し乱暴な戸の開け方だ。

『いらつしゃいませこんばんはー』

遼と新谷の、またしてもユニゾンが耳に届く。出入口が見えない京介も次いで挨拶しようと思を吸い——吸って、いきなり目の前に現れた人物に、そのまままるごと息を呑んだ。

「お願い、一緒に来て……！」

「は——」

昨日の彼女だった。今まさに、京介が思いをめぐらしていた。

「無理なこと言ってるのは分かってるの、でもお願い、一緒に来て……」

——いきなり過ぎて事態が飲み込めない。でもひとつだけ分かっていることがある。

目の前に困っている女の子がいて、自分のことを必要としている

——それだけは、今の京介にも理解できた。

「……見て分かんと思いますけど、俺今仕事なんです」

「だから、お願いしてるじゃない！」

「それが、人にモノ頼む態度ですか」

「……っ、一生の、お願いだからっ……」

——はぁ、と息を吐いて清掃していた手を止めた。

「今、いくら持ってるの？」

「え……」

「前に500万用意してくるって言わなかったか」

言った。初日に。でも——。

「今……は、315円」

悔しそうに唇を噛み、仕方なしに呟く。

京介は、二度目のため息を吐いた。

——結局、大概俺もお人好しなんだよな。

「……いいよ。買われてやるよ、315円で」

おい、深山？と話を聞いていたらしい新谷の困惑した声が聞こえる。無視した。

「買われてやるから——こんなところで一生のお願いなんか使うな」

今度は呆気にとられているのは彼女の方だった。そのまますぐにバックルームに戻り、道具を片付けて、ユニフォームも脱ぐ。財布と携帯をアウターのポケットに突っ込んで、退勤登録も忘れずに済ませた。

「行くぞ」

さっきのままでつつ立っていた彼女の左手を引いて、カウンターに歩み寄る。

「そういうことだから、あと頼んだ」

「えっ？はあ！？」

状況に頭がついていかない新谷が、素っ頓狂な声を出す。

めんどくさくなつたのでまあいいかと今度は遠に視線を移して、

「頼んだから」ともう一回繰り返した。遠は、いつもの何を考えているか分からない表情で、ただ黙って頷いた。

店を出ると、彼女が焦ったふう言葉紡いだ。

「ほんとに、いいの」

だって仕事の途中——そう言っ、それでも歩も繋いだ手の強さも弛めない京介に、彼女はまた黙って口を閉じた。

「…その、仕事で言っただのにそれでも一緒に来いって言ったのはそっちでしょーが。何を今更」

言っでやると、グツと黙り込む。だけれど、返しも早かった。

「でも！315円だったし、全然知り合いでもないのに…」

それを言っのはどの口か。思っけれど、実際口から出た声音は優しいもので。

「…いいんだよ」

歩を止めて、彼女を振り返った。

ブラウンに近い、明るい茶色の瞳と視線がかち合う。

「どうせ遅かれ早かれ捕まる運命だったんだって」

「え？」

「なんでもない。こつちの話」

再び手を引いて歩きながら、京介は思う。

——きつと自分は、最初に一万円を差し出されていたときから、彼女に心の8割囚われていた。そうして、『一緒に来て』と言った少女の、気丈な態度とは裏腹に握りしめられた両の拳の震え——それを見たときに、残りの2割も囚われた。

だから、こうなったのはもう仕方ない。…そう、感じている。

「…ところで一緒に来てって、どこに行くんだ？」

肝心なところ聞いてなかった、今もう20時なるけど？

そう見やると、彼女は一瞬考え込んだ。再び上げた顔には、決意の表情が浮かんでいる。

「——函館に」

「………はい？」

一瞬思考が飛んだ。聞き間違いか、ぽどうん？

「函館に、行く」

聞き間違いではなかったらしい。残念なことに。

「あ…っんたはまた何をいきなり」

「行くの、函館に」

意志の強い瞳は揺らがない。

は…函館に？今から？

「ないない、ありえない」

「それでも行くの！」

彼女は駄々をこねるように唇を噛みしめた。その表情をされると自分は弱い、ということとはつくに分かっている。

「…、分かった。じゃあ、とりあえず今日は電車使って行けるとこまで行こう。まだ終電でもないし。できるだけ安くあげたいから

普通列車で行く。異論はないな？」

一気に今日これからの予定を告げると、彼女は黙って頷いた。行けさえすればそうそう文句はないらしい。

それならば、次することは決まっている。当面のお金をおろさなければならぬ。

どっかコンビニ、と思うが、あおして出てきた手前自分が働いているコンビニに戻るのもキマらなくて嫌だった。すると彼女が考えていることを察したのか、

「お金おろすなら、駅にもコンビニある。あたしも行きたい」

「そうだっけ？じゃあそうしよう」

そんなわけで、二人は駅に向かって歩き始めた。

この謎だらけの少女に聞きたいことは山ほどあったが、それは後からいくらかでも聞けるだろう。

とりあえず今は駅に――。

と、そこで初めて店からずっと手を繋ぎっぱなしだったことに気がついた。

年頃の女子からしたら、好きでもない男にずっと手を握られているのは嫌だろうと「あ、手、ごめん」と謝って離す。

離れた手は、そうするのが惜しいと思わされるくらいには、柔らかくて、握っていて気持ちのいい手だった。

て、変態か！俺は！

バツの悪い思いをしながら、彼女得意のあの勢いで詰なられるのかと、本人を見る。返ってきた答えは、一言。

ううん、それだけだった。

存外おとなしいその反応に、怪訝に思い顔を覗き込む。京介170センチ、相手は目算155センチくらいな為、結構な努力が必要だ。

彼女は、心ここにあらずといった表情で、今の今まで京介が握っていた左手を見つめている。

…やっぱ嫌がられた？でもそこまで嫌悪感あるような感じでもな

いしな。

無意識的にじっと観察していると――

「必要以上に近寄らないでっ。あと見るな！」

いきなりふくらはぎあたりにバシッと強烈な蹴りを入れられた。

「いてえ！」

季節柄履いていた彼女のブーツの踵がより凶器となって痛い。

「オマエなあ、口は出しても足出すな、足！」

「フン」

叫ぶ京介を無視して、彼女は歩行を再開させる。

可愛くねえな！

心中毒づくが、口には決して出さない。出したらまた蹴られる気がする。

――函館への二人旅の、始まりだった。

そのあと、駅に着いてから携帯を見ると遼からメールが届いていた。開くと、『ちなみにバックで言ってた新谷のお気に入りってその子だよ。新谷が深山いつのまにっつてうるさい。追及がうるさいだろっけどこれからいろいろ頑張っつて』簡潔にそれだけ書かれていた。新谷のお気に入りっつて、こいつだったのか！

京介は天を振り仰いで、あの時ちゃんと話を聞かなかった自分を後悔した。

第8話 分かったことは一つだけ（前書き）

間が空いてしまい申し訳ないですく
>
続きをどうぞ！

第8話 分かったことは一つだけ

「オマエ、うちのコンビニにはよく来るのか？」

電車に無事により、一息ついたところで、京介はいくつかあるうちの疑問の一つをぶつけた。

遼や新谷の発言から、ある程度の常連なのだろうと予想はつけているが、いかんせん新谷が情報源だと信憑性がない。なにしろ新谷は、一度見て自分がイイと思った女の子の顔は忘れない男だ。一度来ただけの女性客の顔でも忘れないのだから、ひとえに相手が常連客だとは言えないのである。

京介の唐突な質問に、微妙に間を開けて隣に座る彼女は、向かいの窓にやっていった視線を緩慢に寄越した。

肩より少し長い、ストレートの茶髪がさらりと揺れて、京介は意味もなくそれをちらりと見る。

「なんで？」

「…新谷が、おまえのことお気に入りみたいだから」

「は？ニイヤ？」

誰それ、と目線で訴えて彼女は首を傾げた。

そっか、コンビニ店員の名前なんてふつつ覚えてないよな、と京介は新谷の容姿を説明する。

「茶髪で、ワックスでちよつとだけ毛先立ててる…人懐っこい感じの、俺と年同じくらいの店員」

「ああ…あの人。苦手」

苦手。今苦手と言ったか、あの新谷のことを。

「たまに物買いにレジ行けば、無駄にキラッキラした笑顔寄越すんだもん。どう返したらいいか、分かんない」

それだけぱつりと言うと、謎だらけの少女はまた黙りこくった。

初めて会ったときからイマイチ人付き合いが苦手そうな雰囲気はあったが、まさにその通りだったらしい。新谷オマエ、得意の色仕

掛けが効いてない、どころか逆効果になってるぞ。

そんなことを本人に言ったら、ショックを受けるだろうか。

ともかくにも、今ここにその本人はいないのでその想像は早々に打ち止めて——でも多分今携帯を見たら新谷その人からきつとすごい数の追及メールが来ている——、京介は窓の外を見ている彼女をそつと観察した。

やっぱり10代に見えるんだけど、なんなんだ家出なのか？

でもさっきから携帯すら確認していない。というか、もはや持つてるかどうかわから怪しい。

親はどうした、何も言ってこないのか。

——その類の質問は、しない方が良さそうだというのはなんとなく雰囲気で分かる。

今自分が聞くことを許されているのは——

「オマエ、名前は？」

ここまでな気がした。一緒に行動するうえで、必要最低限なライン。

「ナマエ……」

オウム返しに呟く彼女に、これもアウトだったかと一瞬ぎくりとする。

でもだったら、呼ぶときどう呼べばいい。

反論されてもないのにそう反論し返そうとして、けれど京介は口をつぐんだ。…息を吸って唇を開く彼女に、気づいたからだ。

「名前は…コウ」

「コウ？」

「そう。コウ」

それ以外は言うつもりはない、と言外に態度で示して、彼女はまた視線を窓に戻した。

まあ、とりあえずはこれで呼び名に困ることはない。言いたくないことを無理に聞くつもりはないし、向こうも言わないだろう。誰だって人に語りたくないことはあって、それを「わがままに付き合

ってやってるんだから事情を洗いざらい説明しろ」なんて、そんな子供なことを言うつもりはない。

そもそもが、自分で選んで一緒に来た。そこに文句などつけるものか。

…それでもなくともなんかややこしい事情ありそうだし。

そう思うのは初めて会ってから今までの雰囲気からの判断だった。ふとコウに目をやれば、目を閉じて窓に頭を預けている。けれど寝ていないことは力が入った肩と、眉間に寄った皺のせいで一目瞭然だった。

何をそんなに肩肘張ってるんだ、と言ったら怒られるだろうか。

あんたには関係ない、と一蹴^{いっしょ}されて終わりかもしれない——この場合文法的表現ではなく現実の行為としてあり得るから恐ろしい。

それでも、出会ったばかりのこの少女の、肩の荷を降ろしてやりたいと思うのはエゴだろうか。

電車は、予定通り目的地に向かって運行を続けている。

…エゴでもいい。それでこいつが——コウが、少しでも楽になるなら。

そう思うから、京介はもうコウのやることに最後まで付き合おう、そう決めていた。

とりあえず今日は直通で函館へはたどり着けない。一旦降りて一夜を越してから次の日また電車に乗り直さなければならぬのだが——なにしろ今回は普通列車での旅だ——、京介は決めかねていた。

…泊まりって、いろいろどうするべきなんだ。

第8話 分かったことは一つだけ（後書き）

そんなわけで、亀だか兎だか分からない不定期更新ですが読んでくださった方本当に本当にありがとうございます！

どれだけ遅くなっても連載中止のような事態になることは必ずないと約束しますのでどうかこの先もよろしく願いますm（――）

m

感想お待ちしております！

第9話 諸事情により

——女性の声のアナウンスが、終着駅だということを告げる。それと共に、どこからかねえという声がする。

それらの音を、京介はどこか遠くから聞いているような気がした。答えたいけど、答えられなくて、もどかしい。

ねえ、という声がもう一度頭に響く。京介はそれでも答えられなかった。いや、答えなかったと言うほうが正しいか。

待て。もうちょっと…、

「ねえ、狸寝入り？」

瞬間、ガツンと弁慶の泣き所に鋭い衝撃が入る。

「痛え！」

直で骨にきた。これで起きない奴はさすがにいないだろう。

狸寝入りなわけあるか、と京介は自分では寝ていると気付いていなかった眠りから一気に覚醒した。

「オマエ…すぐ足出す癖どうにかしたほうがいいんじゃないか」

この先何かあるたびに足を出されたのではたまったもんじゃない。帰る頃には一体、と考えて一瞬空恐ろしくなった。

蹴られたところをさすりながら窺うと、京介の脛を蹴った張本人

——コウは、ふいっと横を向いてしまう。

そのまま座席から立ち上がり、一番近くの出口へ向かっていった。

「…おい」

「終着」

答えるのも面倒くさいとばかりに一瞥をくれたコウは、ゆっくりとした動作でホームに降り立つ。

もう着いてたのか。

気付いていなかった京介は、少し急ぎ足で追いかけた。

…最初から分かったことだけど、マイペースだよな相当。

小さな背中を追いながら、なぜだか既視感に襲われる。

なんでだろうと考えて——姉の顔が思い浮かんだ。

…似てる、ゴーイングマイウェイな感じがとてつもなく似てる。
傍若無人というか厚顔不遜というか、とにかくその部類に入る人種だ。

なんでだ。なんで俺のまわりにはそんな奴ばかりなんだ。

姉然り、コウ然り、はたまた遼や新谷もその部類に入ってもおかしくない。

ってか遼は絶対そうだ。なんかそういう奴らを引き寄せる磁石でもついてんのか、俺は。

辟易しながら前に行くコウを見つめる。出会ってからずっと彼女が使い続けているシヨルダーバッグが揺れていた。

駅を出ると、すぐ目の前にビジネスホテルがあった。泊まるころはまさにその辺のビジネスホテルにしようと考えをまとめた京介だが、コウにはまだそのことを言っていない。

「なあ、今日泊まるとこなんだけど」

「どこでもいい。なんでもいい」

「…お金は？」

「……………あんたに、心配されなくらいには」

微妙な間が空いた。

だけどもっすぐ前を見て言い切るコウを見たら、嘘だとは思えない。なんでそんなお金持ってるんだ、とも追及できない。

…ていうか、どこでもいい、なんでもいいって年頃の女の子が言っちゃいけないだろ。

その言葉が口について出ることはなく、黙ってホテルに向かって歩き始めた。わりと都会らしいこの辺では、深夜近くても人が多い。

いづらか歩いてふと横を見ると、コウの姿が消えていた。

「はっ？」

なんでだ！焦って振り向く。周囲に視線を走らせると、当の本人は数メートル後ろで酔っ払いのサラリーマンに絡まれていた。

「……………おい……」

頭を抱える。

絡まれやすすぎだろ！

コウは腕を掴まれていた。——抵抗する素振りほとんどない。口でなんとか言って離れてくれる相手ならいいが、どうもそうは見えないのは京介の心配のしすぎだろうか。

つい一瞬考え込んでいると、その隙に男が彼女の腰を引き寄せた。その行動を視界に入れた瞬間、もう体は無意識に動く。

「——コウ！」

「……………え、」

名前を呼んで、身体ごと自分の方へ奪いとる。出会ってから初めて呼んだ名前には不思議と違和感がなかったが、当の彼女が『コウ』と呼んだ京介を潤んだ目で呆然と見つめた。

なぜそんな反応なのか。疑問が浮かんだけれど、今の優先事項はそこじゃない。

サラリーマンは、ひたすらきょとんとしていた。

「すいません、俺たち急いでるんで。…行くぞ」

「ちよつと」

彼女の反応なんて——そんなの、知ったことか。強引に手を引いて歩きだす。

——コウが、他の知らない奴に易々と触れられるのがどうして
も我慢ならなかった。

そのまま黙々と、つないだ手を引いてホテルまで歩き続ける。

入り口の自動ドアを抜けたところで彼女が反応した。

「ここなの？」

「そうだけど。どこでもいいって言ったら、文句は受け付けないか

らな」

「そうじゃなくて！…あたしは全然、その辺のネットカフェでも」
「いいとか言うなよ。それは俺が嫌だ。オマエを…コウをそんなところで寝かせるくらいなら金くらい出す」

「…なにそれ」

どういう意味よ、と聞かれる前にカウンターに進んだ。聞かれたところで意味なんて答えられない。

——今は、まだ。

「すいません、部屋2つ空いてますか」

「ご予約の方は？」

受付の男性が手慣れた様子で質問を返す。もちろん予約などしてない。

「すいません…急だったもので、していないんです。やっぱり、駄目ですか」

「駄目ということはないんですけど…ダブルが一部屋しか空いてないんです」

「一部屋…」

あまりにもなべタ展開に、眉根を寄せる。ただでさえ付き合っていない男女が泊まりなんてまずいのに、一緒の部屋はもつとまずい。

考え込むと、一步後ろにいたコウがずいっと前に出てきた。出てくるや否や、きっぱりと言う。

「いいですそれで。泊めてください」

「おい！」

「いいでしょべつに。あたしがいいって言ってるんだから」

「仮にオマエがよくてもこっちの事情がな…！」

言いかけて、はっと口をつぐんだ。

…なにかとんでもないことを口走りかけた気が。黙ると、コウが怪訝そうに見上げている。受付の人が気まずそうに視線をずらしている。…まだ聡い女性相手じゃなかったただけマシだと思つとこ

るだろうか。

「…とにかく。あたしはいいよ、これで。なんならやっぱネットカフェ」

「分かったよ！すいません、お願いします」

ほつとくと本気でネットカフェに行きそうなので、受付の人にぺこりと頭を下げた。かしこまりましたと向こうも頭を下げて、一連の手続きのあと、二人は部屋へ向かった。今晚ホテル従業員の間の話のネタにされるんだらうなと思うと頭が痛かったが、考えないことに決めこんだ。

第10話 半分こ

部屋に入ると、いきなりコウが部屋付きのイスを持ってきて、それをテレビの前に陣取って膝を抱えて座り込んだ。

「あたしここにいます」

「へ？」

「ここにいるから。そっちも自由に寝て」

一瞬頷きかけて、はっと我に返る。

「…ちよつと待て。意味分からん、何のためにホテルに泊まったんだよ」

「…あんたが寝るためでしょ」

「ちげーよ！オマエを寝かせるためだつつの！そんならいさっきの会話から察しろ！」

「……………」

コウが難しい顔で黙りこくって、俯いた。
分かれよ、そんなくらい！

「…俺こっちにいるから。コウがベッド使え」

言つと、コウがゆるゆると顔を上げた。立っている京介を涙目で見上げる。

…心臓が大きく脈打った。——だからなんでその表情。

硬直し、困惑する京介にか細い呟きが聞こえる。

「今、また名前…」

は…名前？

「さっきも…外で名前呼んだ」

話の意図が、つかめない。

「呼んだ…けど、まづかったか？」

自分に名前を覚えてくれたということは呼んでもいいのだと思っていたが、違うのだろうか。

「違う。そうじゃなくて…」

ふるふると首を振って、イスの上に立てていた両膝に顔を埋める。

「誰かに名前呼ばれるの、久しぶり……」

独り言か京介へ向けた言葉なのか。微妙に判断のつきにくい声音に、何か反応すべきなのか迷う。

ただ、その時のコウがとても小さく見えて、肩が震えている気がして——泣くのか？

京介は気がついたら、コウを正面から抱きしめていた。

「……………」

コウは何も言わない。

イスに座っている彼女をきつくは抱きしめられないから、京介は優しく力をこめる。

「俺ずつと、気になってるんだよな。オマエ何者？年は？なんでいきなり函館に？……一緒に、って選んだのがなんで俺」

腕の中にいるコウの表情は、京介からは分からない。それでも絶の反応が出ないから、そのまま言葉をつむぎ続けた。

「むこう出てきてからずっと考えてたんだ。聞けないし。それでもとりあえず最後まで付き合おうって思ってたんだけど——でも、今のオマエ見てたらなんかもうそういうの、どうでもよくなった。ただ……今この場にいるコウを悲しい顔にさせたくないって、なんか今はそれだけ思う」

……せめて俺と一緒にいる間だけでも。

囁くと、コウの体がピクツと揺れた。

「事情、話したくないなら話さなくていいよ。でも、話す気になったらその時は話してくれたら、まあ嬉しいかもな」

そこまで言って、そつと彼女を離れた。

震えがとまっていたから、ほつと息をつく。

「寝ろよ、今日はもう。……この距離でよく見たら目の下にクマあるじゃん」

立ち上がって、ぼんぼんと2回頭をたたく。

その間、ただコウは京介を見つめていた。
京介は話をたたんだつもりで歩き始める。
けれど、はしつと服の裾を捕まれた。

「ん？」

振り向くと、イスに座ったままのコウは、下を向いている。

「…るい、」

「え？」

「ずるい、自分だけ！」

「な…何が？」

次の瞬間、コウは立ち上がる。服の裾は掴んだままだ。

「あたしの名前は名乗らせて、呼んでおいて、そんな優しいこと言
つて！自分は名前教えてくれないわけ！？…せっかく……せっかく
素直にお礼言いたくても、名前呼んでありがとうも言えないじゃん
！」

コウの気迫に圧倒された。…怒るところ、そこなのか。

「名前…、言つてなかったっけ」

「言つてない」

涙目のままで拗ねたような表情をするから、思わず可愛い、と思
う。…そうじゃなくて、自分！ 頼むから今の状況で可愛いとか感
じるな！

「ねえつてば」

「あ、ああ」

「だから名前は？」

「……」

コウが下の名前で名乗ったので、こっちも下の名前を言うべきか
と一瞬迷う。

しかしその迷いはほんとに一瞬で、呼んでほしいと思ったのは無
条件で下の名前だった。

「京介」

「キョウスケ？」

「ああ、漢字は……」

電話の横に置いてある、備え付けのメモにさらさらと字を書く。

コウはそれを覗き込み、一度噛みしめるように京介、と呟いた。

服の裾を掴む力が強くなったと思うと――。

「ありがとう、京介」

俯いたまま小さな声でぽつりと言った。

「……どういたしまして」

――微妙にむず痒い空気になってなんだか居たたまれないのは俺だけか。

ゴホン、と一つ咳をして気を取り直す。

「よし、さすがにもう寝よう。その前にコウ、風呂だけ入ってくれば」

見やると、こくつと黙ってうなずいて風呂場へ向かう。持ってきたいたらしい本当に必要最低限の着替えを持って、バスルームに消えた。

それを見届けて、京介はベッドに腰掛けて携帯を開く。コンビニを出てきてから初めて携帯を操作して――驚愕した。

なんだこの着信とメールの数!!

不在着信、3件。

メール、12件。

恐る恐る開くと、不在着信の方は3件とも姉だった。いつもなら深夜12時を過ぎて帰宅しようが、飲み会で朝帰りしようが何も言わない姉だが、今日に限ってなぜかしつこく電話してきていたらしい。

不思議に思っリダイアルする。2回目のコールで姉が出た。

「あ、もしも」

『お姉さまに3回も電話かけさせやがってしかも3回とも無視るなんて――い度胸ね京介? いつからあんたはそんなに偉くなったのかしら』

「……………」

.....」
『聞いてんの京介、ねえ』

「.....」
『返事しないと次会ったときはったおす』

「ナンノヨウデスカ」

『あのね、私もうあの家にいないから』

「.....はい？」

『だからあ、言ったじゃんこないだ、彼氏ンちに行くって』
言ってたけど、と京介は口籠もる。

早すぎ、見送るくらいはしてやろうと思ってたのに、と呟くと。

『うんうん、これだから弟って可愛いのよねー。ありがとう、私は大丈夫だから。だからさ.....』

「ん？」

『あの部屋の管理、お願いね。家賃高めだけど、なんならだれか友達とかとシェアしてもいいし』

あーそっかシェアか.....

その手もありか、と一人うなづく。

『ま、そんなわけだから。ほんとは今日あんたがバイトから戻ってきたら話そうと思ってたんだけど、来ないから出てきちゃった。帰ってきても私いないからね？じゃ、よろしくー』

そう言い残して電話はぶつつり切れた。

.....どこまで自由人なんだあいつ。

待ち受けに戻った画面を見ながら息をつく。そういえば、と思い出して残ったメールの受信BOXを開くと、やっぱりというかなんというか、ほとんどの相手は新谷だった。

“おまえあの子と知り合いなのか”

“どういうことだ、説明しろ”

“コンビニは暇だけど俺の心が暇じゃない”

“知り合いなら俺に紹介しろ”

“つかドコ行ったんだ”

“返信しろ、アホ”

“まさかどっかに連れこんでんじゃねーだろな！”

……………等々。

待ち受けにいつまでも未読メールの表示が出ているのもうざったいので一応すべて目を通したが、やっぱりうざったいのでパタンと携帯を閉じて放置した。

ちょうどそのタイミングでコウがバスルームから出てくる。備え付けの浴衣に着替えていて、なんというか直視は避けることにした。

「次、入るの？」

「……………いや、俺は朝でいい」

「…そう」

「もう寝よう。日付変わってるし、明日もふつうに朝早い。さっきも言ったけど、コウ、ベッド使えよ？俺は…椅子でいいから」

「は？ベッドに寝ないの」

「一緒に寝るわけにいかねーだろ」

ふつうに考えてあり得ない。それに、コウのことは名前以外知らないが、もしかしたら彼氏くらいいるかもしれないのだ。…てかこの容姿ならいるだろふつーに。

…だったらその彼氏に悪い。

黙りこくった当の彼女は、なにか逡巡している。

「……………いいよ」

「へ？」

「ベッド、使って良いから。どうせあたしが椅子使うつて言ってもベッドに寝なきゃダメっていうんでしょ？だったら、そっちも…京介もベッド使って。あたしだけ気持ち良く寝るなんてできない」

—— 瞬間を言われたのか分からなくて呆然とした。

「…コウはそれでいいの」

「うん」

頷くコウは、まっすぐ京介を見る。そしてそのまま京介のいる

ベッドまで来ると、自ら布団をめくってベッドに潜り込んだ。

「——半分こだからね」

半分こって、小学生か。思ったけれど口には出さず、代わりにこぼれ出たのは笑みだった。

京介も靴や上着を脱いで寝やすい格好になる。隣を気にしながら自分もベッドに入ると、コウが微妙に身じろぎする気配がした。

「電気消すぞ？」

「えっ……」

「暗いのだめか？」

「……………」

沈黙は肯定として受け取る。

「じゃあつけとく」

消しかけた電気をまたつける。背中を向けているコウの肩が、ほつと下がったのが分かった。

「おやすみ」

声をかけると、

「……………」

……………おやすみ

かなり長い沈黙のあと、蚊の鳴くような声でコウから返事があった。

第11話 目的地

京介が7時に目を覚まして隣を見ると、もうそこにコウの姿はなかった。一瞬呆然として、直後ベッドから跳ね起きる。

——コウはいた。昨夜そのままにしていたテレビの前の椅子に座って、どうやらそれこそテレビを見ているようだった。

「……………コウ？」

後ろ姿に声をかける。気づけば彼女はもう浴衣から私服になっていて、寝ていたはずの布団の半分も冷たくて、果たして本当にここで寝ていたのか疑わしくなる。

「オマエ、ちゃんと寝たか」

「……………うん」

間が怪しい。

「嘘つくなよ…寝たか？」

「寝た、つてば」

追及しても正直に言わなそうなので、これ以上はやめにした。

洗面所に行って顔を洗い、歯を磨く。

「コウ、…はもう行く準備できてんだな」

洗面所から出てきて後ろ姿に問い掛けると、こくりと頷くのが見て取れた。

「じゃあ、行くか」

部屋の鍵を手に取り、最後に忘れ物がないか見渡す。まあ自分の持ち物などバイトから飛び出してきて財布とケータイだけなので、忘れようがないといえはない。見た限りコウのものも置き忘れはなさそうなので、二人で部屋を出た。

チェックアウトするときは昨夜とは違う受け付けの人で、それにちよつとだけ安堵した。もし昨日と同じ人が担当だったら、双方気まずい思いをしたことだろう。

駅に着くと、そこから函館行きの普通電車で再び乗車した。昼前には着くらしい。駅のホームの売店で買った二人ぶんの朝ごはん——まあ、おにぎりとお茶だ——を開けて一人ぶんをコウに渡すと、こうはソレを戸惑いながら受け取った。

「朝食べないと力出ないから」

顎で食べ、と示す。

「でも……」

「おごりだよ。はい、食べて」

バリツとフィルムを開けてやり、おにぎりをコウにもう一度渡す。ゆっくり受け取ったコウの両手を見てちっさ——！と思わず声をあげそうになった。

手えちっさ——！こんなんでいろいろやっててんのか！？て今俺が気にかかるところじゃないかもしんねーけど！でも小さく見えすぎていつそ握り潰したくなる！

そこまで思考が横滑りして、違う、今はなかったことにと一人で焦る。隣のコウを確認すると、俯いたままおにぎりを口にしていた。髪に隠れて顔は見えない。それでもなぜか、その顔は暗く曇ったままの気がして、京介は胸が締め付けられる感じがするのだった。電車の中で、数えるほどの会話を交わした。その中でコウから話し掛けてきたのはただの一回だけだった。

「昨日——、電話してたよね」

「……ああ、聞こえてたのか」

こくん、と頷く。

「電話、家の人？」

なぜそんなことを聞くんだろう——思っ、ふと気づいた。

コウには一度も家族らしき人から連絡が入っていない——少なくとも京介が知っているかぎりでは。もしかしたら知らない間に連絡がきていたのかもしれない、もしかしたら連絡がきていても単に

コウがそれを受けていないだけなのかもしれない。

しかしその希望的観測は次のコウの台詞で打ち消された。

「――羨ましい」

「え……」

それってどういう、

「……私にはもう私の心配をしてくれる人がいないから」

言ってから、言った彼女本人が傷ついたような顔をした。

泣くか――、

息を呑んでコウを見る。けれど彼女は、結局涙一つ見せなかった。他にも何回か会話はした。でも、その時のただ一回の会話だけが京介の記憶に痛さを伴って刻み込まれている。

函館駅に降り立つと、眼前にはなんだか懐かしい風景が広がった。

そういえば函館には家族旅行で小さいとき一度だけ来たなと思う出す。

はたと思った。『函館』には来た。でもそのあとは――？

隣に立っているコウに問い掛けようと視線を向ける。しかし京介が何かを言う前に、コウは歩きだした。――半ばふらふらと、何かに吸い寄せられるように。

あの会話のあとから、函館に近づくほど電車の中で彼女は無口になっていった。函館に何かがあるのか。彼女にとっての何が――、若干危なげなコウの足取りをはらはらしながら見守って、それでも何かあったらいつでも手は出せるように斜め後方に位置を取る。

コウは路面電車に乗ろうとしているようだ。黙ってあとを着いていく。

——路面電車で揺られて最終的に到着したのは、誰でも名前は知っているであろう函館山だった。

第12話 涙

……函館山か。ここも旅行で一度だけ来たな。

一瞬昔を思い出して、ふっと笑う。あの時は確か初夏に来ていた気がするが、今回は初冬だ。11月の函館山は、初旬といえど予想していたよりちょっと寒かった。

冷たい風が展望台のフェンスに腕を寄りかける京介と、両手をそっと置いただけのコウを吹き付ける。京介はだめだよっぱ寒い、と首を心持ち引つ込めた。

——路面電車に乗った後は当然ロープウェイに乗って山頂まで来て、その間コウはやっぱり一言も喋らなかった。山に近づくほどそれには拍車がかかって、空気まで重く感じてしまうほどである。そして今は目的地の函館山だが、やっぱりコウは一言も喋っていない。

けれど、展望台につくと重い空気自体はいつの間にかやわらかくなっていた。フェンスに両手を置いた体勢で、——もう10分ほどコウはぼつと景色を目に映している。

…声をかけるのが憚られた。ここまで口を挟めない空気と挟まない意志で過ごしてきて京介に今さら何かを言えるワケがない。

かける言葉が分からないし、そもそも言葉をかけていい場面なのかどうかすら判断がつかないのだ。

途方にくれかけてもう一度隣のコウを伺い——そしてこれまでの短い旅の中で一番ぎよつとした。

京介の隣で、コウは泣いていた。

「な、なに泣いてんだ!？」

「——」

「なんでいきなり泣くんだオマエはっ」

声もあげずしゃくり上げることもせず、あまつさえ表情も変えないうで、彼女はただ淡々と涙をこぼしていた。その様はどこか美し

く見えて、それ以上に痛々しい。

——泣かなかったくせに、今までどんな泣きそうな顔しても。
なのに、なんの予兆もなくいきなり涙を流すなんて——そんな
の、反則だ。

「コウ、」

もうだめだオチた、とため息をこぼす。

隣の彼女を抱き寄せて、腕のなかに閉じ込めた。「頼むから…、
理由教えて。なんでいきなり泣いたんだ、函館は一体コウにとって
なにがあるんだよ…」

自分の中でラインが変わったとたんずっと訊かないようにしよう
と思っていた疑問がするりと口から滑り出た。

ああ訊いてしまった、と思ったけれどもう遅い。

コウに悲しい顔はさせたくない、と思って昨日それはコウ自身に
も伝えたけれど、元から曖昧だったこの境界線を踏み越える気はな
かったのに。

だってこの旅が終わったら、またただのコンビニの店員と客に戻
る。その関係に必要な以上の親交は必要ない、そう思って。

けれどコウは泣いた。京介にとってそれはもうスルーできる範疇
じゃなかった。スルーしたくない、と思うほどの感情をもう持って
いる。

俺が悪いんじゃない、と意地を張る。この境界線を切らせたのは
彼女だ。

「コウ……」

耳元で名前を呼ぶ。

「俺にじゃ話す価値ないか」

抱え込んでいるものを吐き出させてやりたいと思う。実行するの
は許されるだろうか。

すると京介の質問に、コウは初めて見せるようなすごい勢いで首
を横に振ってみせた。

「そんなことない…っ」

「じゃあ、教えてほしい。俺、オマエのこと知りたいんだ多分」

コウが腕のなかで顔を上げて、目を見開いた。

そうして一気にその瞳を涙に濡らす。

「京介、京介、京介っ……」

「ん？」

返事をしてやると、コウがその細い手で京介の服にしがみついた。そしてそこから先は大泣きだった。ぼろぼろぼろ大粒の涙をこぼしながらコウは自分のことを話す。

ほんとはずっと泣きたかったの、お母さんが死んだときからずっと。だけど泣けなかった。どうしてお母さんが死ななきやいけなかったの？あたし達何か悪いことした？一人になったあたしはどうしたらいいの？分かんないよ、疲れた、あたしも一緒に連れてってくれたら良かったのに。

コウはその言葉を最後に後はただ声をあげてわんわん泣いた。ちらほらという観光客が気にしつつも遠巻きに視線を送ってくるのが分かったが、京介はそれらを意にも介さずコウをずっと抱きしめていた。

自分にはそれしかできることがなかったように思えた。

腕のなかのコウはずっと涙を流し続けている。けれど出会った時から泣くのを我慢しているような表情や、肩に力が入っているような堅さを見せていたコウが感情まかせに泣いているのを見て、京介は妙にほっとしていた。

第13話 涙のワケ

——末期の胃がんだった。発見された時にはもう緩和治療しか打つ手はなくなっていて、それはつまりただ死を待つことを意味していた。

緩和治療になります。苦痛を取りのぞき、清潔を保つ看護をしていくように尽力します。

医師や看護師のそんな言葉は到底意味がない。

そんなこといいから治してよ！腫瘍なんて取ってよ！お母さんを死なせないで！生きてくれたらそれでいいのに！

頭では分かっていた。医療にも不可能はあるということも、転移が全身に起こっていて手遅れなことも、自分には何もできないことも。だけど感情がついていかなかった。認められるわけがない。今となってはたった一人の家族、その一人を失うなど。

それでもそれは変えようのない現実で、医師の見立て通りの3ヶ月後に母は逝った。

入院していた時の費用は保険と、足りない分は自分の奨学金から出した。葬式や火葬等はこの時が初対面の母方の祖父——つまり母の父親だ——が行ってくれたのだが、風当たりはあまりよくなかった。それが何故なのかは最初分からなかったけれど……この時の周囲の親戚の噂で初めて知って合点がいった。

母と、顔がおぼろげにしか思い出せない父はかけおち同然での恋愛結婚だったらしい。実家には勘当されたも当然の状態だったという。

それを知ったとき、何も考えられない頭でただ『お母さんらしいな』と思った。その父はコウが幼いときに交通事故で亡くなっているのでよく分らない。

火葬や葬式の間中、泣きたかったのに涙は出なかった。何より、大好きな母の陰口を言うそんな親戚の前で、涙なんて見せてたまる

かと思っていた。

その後その祖父の家に引き取られたが、初対面同然なのに加え勘当された家なので居心地も悪く、1ヶ月経った今も祖父との関係に改善の兆しは見えていない。

せっかく入った大学にも段々行かなくなった。このまま学校に行き続けて授業料を払い切れるか自信がなかったし、精神面でもきついものがあつた。元々友達はいほうではなく、本来なら安らげる場所であるはずの家も、コウにとっては安らげる場所ではなかったから。

ここ最近朝祖父の家を出て、図書館などで適当に時間をつぶして夜帰る——そんな生活が続いていた。

時間の経過が、静寂が、じわじわと母はもういないという事実をコウに突き付け、今なら泣けそうだと思うときもあった。

けれど泣けない。一度タイミングを逃したからなのか、涙腺は一向にゆるんではくれない。そして気付いたときには泣き方を忘れていた。

自分にはもう居場所がない。

ただ声をあげて泣くことさえ許される居場所が。

話を聴いてほしい。黙って傍にいてほしい。自分の存在を無条件で許してくれる人の傍にいたい。

その想いが日毎に強くなるばかりで——コウにとってそのすべての対象は、母だった。けれどその母はもういない。

「…函館には、そのお母さんとの思い出がたくさんあるの」

一通り泣きじゃくったあと、少し落ち着いたコウと京介は、外の展望台から中に入ってベンチに座って話をしていた。

京介はひたすら黙ってそれらの話を聞いた。そして納得した。

泣きそうな顔をするくせに泣かないこと。肩肘が常に張っていること。なのにとどこか危ういところがあること。不思議に思っていたその全部が、今かつちりと繋がっていた。

「だから…函館に来ようって？」

こく、と頷く。

「ここに来れば、会える気がして。…お母さん函館山が大好きだから」

年に2、3回は一緒に来てた。コウはそう呟いて目を伏せた。

『大好き』という言葉が過去表現になっていないことに胸を突かれる。

「…………泣けるかも、って思ったの」

赤くなった目を伏せたまま、コウは言う。

「お母さんが大好きで、いつも来てたここなら、泣けるかもって。そしたらちよつとはラクになれるかなって」

「…………ラクになったか」

コウは曖昧に笑ってその質問には答えない。

「少しだけ…すつきりはしたかも。ありがとう、京介」

「……………お礼言われるようなこと、してねーよ」

自分は何もできなかった。

コウが泣いているときも、話しているときも、そして今も。

肩の荷を降ろしてやりたいなんて、そんなことを思っていたくせに何もできなかったのだ。

だからお礼を言われるとどうしていいかわからなくなる。

ありがとうなんて言うな。言われるだけの働きなんてしてないんだ。

「でもやっぱりあたしにとってはありがたいだよ」

「……………」

「だって一緒に来てくれた。泣かせてくれた」

「それはっ……………俺じゃないだろ。コウのお母さんの力だ」

コウが力なく笑う。

悲しいような、寂しいような、嬉しさが混じってるような、複雑な笑顔だった。

——きっと、笑顔の裏のその胸の内を推し量ることなんて京介には一生できないんだろう。

「ありがとう」

だけれど、噛み締めるようにコウはもう一度そう言った。

第14話 営業方針（前書き）

大変長らくお待たせいたしました、14話になります。

第14話 営業方針

結局その日、二人は夕方まで函館山にいた。

コウは函館山は夕暮れに移り変わる瞬間の景色が一番きれいと言
つてずっと景色を見ていた。

——こいつの目には何が映ってんだろっな…。

自分とはまったく違う色々なものが見えている気がして、京介は
その横顔から目が離せなかった。

そのあと山を降りて、二人は駅に向かった。結局夜になってしま
ったからもう一泊しなければならず、それは途中から見当がついて
いたので今回は予約している。シングルは取れなかったけれどツイ
ンの部屋がとれた。

ツイン取れて良かった！昨日のダブルに比べたらよっぽどありが
たい！

内心ほっとしている京介だったが、それでもコウと——好きだ
と思っている女と同じ部屋なのには変わりない。

この気持ちをこいつに言う気はさらさらないんだ、だからしっか
りしろ俺。

今まで大変な思いをしてきて、今日やっと泣き方を思い出したよ
うなコウに、自分の気持ちをぶつけて困らせることだけはしたくな
かった。

このまま「親切な人」で終わってもいい。だからこの旅が終わっ
てもあのコンビ二に、変わらず客として来てくれるか。

心の中で問いかける。

それを口に出す勇氣はなかった。

「昨日…」

「ん？」

コウが小さな声で呟いたのは、寝る段になって二人ともベッドに入ったときだ。

「昨日…ほんとは寝れてなかった。ていうかお母さんがいなくなつてからずっと…」

「そっか」

「やっぱりな、と思う。」

「やたらネットカフェ主張をしていたのもそのためなのだろう。どうせベッドに横になっても眠れないから。」

「やっぱり、という反応。…分かるもの？」

「目のしたにクマがあるの気づいてたし。朝と昨日の夜の状態見てもそうかなって思うくらいには」

「…そう」

コウが黙る。だから京介はこれを伝えるには今だと思った。

「——あのさコウおまえ、」

「…なに」

「もう今朝みたいなこと言うなよ」

唐突な京介の言葉にコウが一瞬当惑した気配がうかがえる。なんのことを指しているのか分からないのだろう。

「だから分かるようにゆっくり繰り返す。」

「電車の中で言ったよな。『もうあたしの心配をしてくれる人がいないから』って」

「…うん」

「いるよ、心配する奴。少なくとも俺は心配する。てかもうだいぶしてる」

「——、」

「なあコウ、だからあんなこともう言わないって約束して。俺にオマエの心配くらいさせてくれ」

「~~~~っ、」

一瞬何かと思った。

コウの泣き声だった。

昼間泣いたように、コウはまた声をあげて泣いていた。

隣のベッドで、ただ子どものように泣いている。

胸が締め付けられる思いがした。

無意識のうちにベッドから出て、隣のベッドで泣きじゃくる小さな彼女の手を握る。

—— やっと泣かせてあげることができた。今度こそ他の誰でもない俺が。

手を離さないまま、空いた方の手で彼女の頭を優しく撫でる。

時折混ざる「京介」という涙声に胸が甘く痛んだ。

俺がコウに感じている感情とコウが俺に感じている感情は種類がきつと違う。

だけどそばにいたいと思う。いつもあのコンビニにいて、コウがつらさを感じたら駆け込み寺になれるように。いつでも受けとめられるように。コウの為に自分の胸は24時間開けていようと思う。

好きという言葉じゃ追いつかない。—— ひたすら甘やかして、ひたすら大切にしたい。

そんな気持ちは初めてだった。

朝、ズキズキと痛む頭でコウは目が覚めた。

すごく痛い…目も痛い…。

ぼうつとした頭で部屋を見渡す。京介はコウの手を握ったまま、床に座って寝ていた。

京介寝てる…。

そう思っではっと気づいた。

自分も寝ていた。——たぶん、母がいなくなってから初めて。なんでだろう。なんで眠れたんだろう。ずっと無理だったのに…。そのおかげでか、胸のつかえが取れたような気がする。

母がいなくなった悲しみは、たぶん一生消えない。

それでも一人になってからは、初めて穏やかな気持ちで迎えた朝だった。

きつと、京介のおかげなんだと思う。

——京介でよかった。一緒に来たのが他の誰でもなくてこのひとで。

元々、コウはここには一人で来るつもりだった。旅費は母がいなくなったあとの生命保険から。お母さんに会いに行くためにお母さんからのお金を使ってなにが悪い、そんな気持ちで。

だけど冷静に考えると不安になった。

自分一人で行けるのか。泊まる場所はどいうするのか。もし何かあったりしたら、自分一人で対処しきれなのか。

答えはどれもNOだ。あと一ヶ月で二十歳といえど、今現在コウは未成年というカテゴリーだ。大学一年生が飲み会などで暗黙の了解で飲めても、社会的にはなんの力もない。

一度躊躇して考える。——それでもあたしはあの場所に行きたい。

そして一緒にと選んだのが京介だった。

決して愛想がいいわけではないけれど、丁寧で誰にでも公平に同じ接客をする彼なら、仮に無茶なお願いをしても聞いてくれる気がした。さすがに一万円で買われてはくれなかったけど、最終的には

やっぱりお願いを聞いてくれた。

親類には頼めない。旅についてきてくれるような友達もいない。だったらいつそ知らない人と行こう。今となつてはあの時の自分の判断は正しいものだったと思える。——知らない人だからこそ打ち明けやすいことも、確かにあるのだ。

今はもう知らない人なんて言えないけど…。

コウのベッドの縁に頭を乗せて熟睡する京介を見て、なぜだかまた泣きたい気持ちになった。

泣き方を思い出した途端泣いてばっかなんで、そんなの自分で自分が馬鹿みたいだ。

涙が静かに頬を伝う。朝日に光って、それは握った京介の手の甲に落ちた。

「ん…」

「あ、ごめん…」

起こしただろうか。

慌てて落ちた涙を拭って、握られていた手も離す。

「コウ？…また泣いてんのかオマエ」

「……………」

答えないでいると、京介がベッド上に座るコウの頭を撫でた。

「…よかったな」

そして一言そう言う。いろんな意味が含まれたよかったなだなと思つた。

——ほんとにこのひとは、

「どこまで優しいの…」

絞りだすように言うとき京介がやさしく笑う。

「俺今優しさ絶賛大安売り中だから」

コウの目を見つめながら、京介はそう宣^{のたま}った。コウは一瞬きよんとして——そうしてそのあと、ぷつと吹き出す。

「ばかだ……………」

——朝日のなかで、コウは久しぶりに何のてらいもない笑顔で

笑った自分を意識していた。

——ばかだ……。

彼女のその泣き笑いが、息を呑むほど綺麗で京介は一瞬息の仕方を忘れていた。

…笑った。笑ってくれた。初めて淋しさがない笑顔を自分に見せてくれた。

なんでだ。

この瞬間を目にするために自分は生まれてきたような気さえして、心臓が痛い。どうすればこの感情に収拾がつくのか全く分からなくて、それと同時にいろんな衝動が京介の中を駆けめぐる。

ちよつと、待て俺。お願いだから今ここで負けんな！

精一杯衝動を抑えつけていると、異変を察知したコウが気遣わし気に手を伸ばしてきたことが気配で知れた。

「京介…？」

ギクツとする。

「ちよ、待て、いま俺に触るな頼むから」

「…は？なんで」

久しぶりに強気口調のコウの声を聞いてほつとする反面、ムカつくほどの焦燥感に苦しむ。

「ごめん、こつちの問題だからほんとほつといてくれ。あと、ちよつと離れて」

「…意味分かんない」

妙な気迫のある京介に気圧されて、それでもコウは怪訝な顔をしながらベッドの上で精一杯京介から離れた。

「…よし。うん、じゃあ俺風呂行ってくるわ」

「は？…夜も入ってたじゃん」

「気にするな！朝にも入りたい気分になっただけだっ」

コウがますます怪訝な顔をする。べつに止めないけど、という声に送られ、京介はバスルームに逃げ込んだ。

シャワー終わったら即刻ホテル出よう、即刻！！

切実な京介の叫びは彼の胸中のみ収められ、部屋で待つコウには知る由もなかった。

第14話 営業方針（後書き）

というわけででしね、やつと現実の私の生活的にも小説の展開的にも一息つけた次第であります！

遅くなったのにはちゃんと理由があるのでですよ（T―T）

とりあえず小説はまだまだ続きます！お優しい方は着いてきてくれる…ハズ…（＾Ｏ＾）ノ

そうそう、この小説のタイトルは…今回お読みいただいてピンと来た方もいると思うんですけど、ヘタレ男京介の心境を表したものだっただけですね！やつとここまできてほつとしてます。

今回は、遅くなったお詫びに短編小説を2つアップしてます 1つは補完になるんですけど、時間のある方はぜひそちらもどうぞ！それでは失礼いたします！

第15話 家路

京介の必死の想いにより朝の早い段階でホテルを出てきた二人は、また電車を乗り継いで地元に向かった。

半ば引きずられるていで出てきたコウは納得していないような微妙な表情である。

「…どうせ今日日曜なんだから、もうちょっとゆっくりしても良かったんじゃないの」

電車のなかでの呟きにギクツと肩を揺らすのは仕方のないことだろう。

「…悪かった。俺今日はまた夕方からバイトあるんだ、だからできるだけ早く帰ろうと思って」

矢継ぎ早にもっともらしい答えを返す自分に辟易とした。…保身に走る自分が情けない。

密かに肩を落とす京介の隣で、コウもまた一瞬傷ついたような顔をする。

「…そっか」

京介にも京介の生活があるんだもんね。

そう小さく呟いて頭を京介に預ける。

——ドクン、と心臓が脈打った。

「コウ、それ…」

どういう意味だ。

尋ねようと隣を覗き込んで、口を閉じる。

コウは京介に頭を預けたままうたた寝していた。朝早く起きていたようだったし、それをそのまま引きずりだしてきたのも自分なのでそのまま寝かせてやることにする。

「…来たときとえらい違いだな」

行きの電車を思い出す。うたた寝していたのは自分で、それをコウが蹴って起こした。コウ自身は電車の中で目を閉じていても、眉

間には皺が寄り肩もガツガツで寝ていないことが一目瞭然だったのは記憶に新しい。

——それが今は完全にリラックスして寝ていた。

こういう面を見せてくれるようになったのはコウにとっても進歩なのであり、喜ばしいことなのだろう。自分に心を開いてきてくれるのだと思う。

……けれど今の京介にとっては、それと同時に厄介だ。

何の疑いもなく寄りかかれること。それがこんなに心地よくて愛しいだなんて知らなかった。

それでもここはホテルのような密室と違って他人の目がある分、まだ自制はきくだろう。

そんな思いで斜め上から彼女を見やる。

ゆっくり深い息をしながら寝入るコウは、こうして見れば本当に何の変哲もないふつうの少女だった。

彼女がこの先例の祖父の家でうまくやっていけるのかどうかは分からないが——。

「俺はいつでも待つてるからな」

胸の内を声にして優しく呟きを落とせば、コウは一瞬身動きしてまた規則的な呼吸を再開させるのだった。

「じゃあ……またな」

「……………」

昼前、辿り着いた駅の構内で最後の挨拶を交わす。一緒にいたのがたった3日間なのが嘘のように離れがたかった。それが自分だけかもしれないとか、そんな可能性は考えないことにする。

目の前で俯くコウは、京介の言葉に答えを返さない。ずっと沈黙

を守っていてそれでいて何か言いたげな微妙な表情に、思わず声をかけた。

「コウ？」

「……………」

「どうした、なんか言いたいことでもあるんだろ？」

言ってやるとコウが瞠目する。弾かれたように顔を上げた。

「なんで」

「もう3日一緒にいたから分かるよ。…言ってみろ」

普通はたった3日じゃ分からないところなのかもしれないが、こ
うなってみて気付く。自分は多分——コウに惹かれていたのだ、
最初から。

「コウ？」

言ってみると促しても黙っている彼女の小さな肩に手をかけて、
覗き込むようにかがんだ。その動作に後押しされたのか、彼女はよ
うやく口を開いた。

「…京介は…」

「ん？」

「一人暮らし？」

「——は？」

予想もしていなかった質問が飛んで来た。

「ああ…と、」

姉と二人だ、と答えようとして今はもうその姉がいらないことを思
い出す。ついでにこれからの自分の生活の気楽さも。

「そうだな一応、一人暮らしの部類に入るだろうな」

「…そう」

「それがどうかしたか」

意図が分からず聞き返したが返しはそれを上回るものだった。

「『いつでも待ってる』っていうのはいつから有効？」

「おまつ…！」

起きてたのか！？

「ねえ、いつから有効」

まさか聞かれているとは思わなかった自分の甘い発言を、対象の本人から告げられて言葉を失う。体温が上昇するのを自覚して二の句が継げない。

とりあえず落ち着け俺ー！…まずはコウの質問に答える。

「いつから…って、べつに、いつからでも」

「信じてもいい？」

コウの小さな手が京介の腕を必死に掴む。

「今の京介の言葉、信じてもいい？」

「——あたりまえだろ」

反射で答えていた。

「じゃあ、お願いがあるの。あたしを京介の部屋に泊めて」

………はい？」

「いつからでもいいなら今から有効。お願い、1ヶ月位でいいの、あたしが…二十歳になるまで」

反射でものを言うのはやはりあまりよろしくないことらしい。

唐突なことを言うコウは真剣な顔をしている。返す言葉は未だ口をつかない。

「……函館に行くとき、家を出てきたの。だから帰る場所がない」

「…家を出てきた？」

ようやく出た言葉はコウのセリフをおうむ返したものだっただった。

どうやら自分はさっきの『泊めて』発言に相当動揺しているらしい。

そりやるだろ、よりにもよってこいつを俺んちに泊めるとかつ！

思わず自分に突っ込んで、ため息が出た。

「…二十歳になったら自分で色々手続きできるじゃん。だからそれまでの間、京介の家に置いてほしい」

コウは俯いて、唇を噛み締める。もう分かる。この表情は喋ると声が揺れる時にそれを我慢する表情だ。つまり、コウの感情が揺さ振られているとき。

まだ完全におさまらない動悸を精神力で無視して、そんなコウを見つめ返した。

—— ああ、きつと俺に断られたらどうしようとか思ってたんだろうな。

今の彼女の心情が容易に読み取れて、思わず頬がゆるむ。その瞬間をコウに目撃されずに良かったと内心思いながら。

バカだな、と言ったら怒るだろうか。断るなんて—— そんなこと選択肢のうちにも入っていないのに。

京介の腕を掴んで離さないその小さな手を、そっとはがして握りこむ。

「……っ、」

駅の喧騒のなかで、コウが息を呑むのが京介にも分かった。

「なあコウ」

「……」

「本当はさ、その今住んでる母方のおじいさん？…その人と関係を修復していくのが一番いいって、オマエも分かってるんだよな」

俯いていた顔を上げたコウの瞳が揺れている。

「俺も一番はそうするべきなんだろうなって思うよ。どうあっても数少ない肉親なんだし」

「……………」

「でも…今はオマエ、疲れてるよな。これからのこと、ゆっくり考える時間だってほしいよな。—— だったら」

「だ、ったら…？」

「いいよ。俺んちにくれば。1ヶ月くらいなら置いてやれる」

コウの瞳がぱあっと明るくなった。

「ほんと!？」

「ああ。その代わり、ひとつだけ条件つけていいか」

条件、という京介の言葉に一瞬コウが怯む。けれど置いてくれる以上その条件を呑まなければならぬのは白明の理だと思ったのだろっ、最後にはつよく頷いた。

「——家ではダラダラしてる。って言ったら言葉悪いけど…あんまり難しいこと考えるな。寝たいなって思ったら寝る、泣きたいなって思ったら泣く。感情を殺すな、そのまんまの Kou でいる」

——それは、京介の意思表示だった。過去の Kou も、現在の Kou も全部ひっくるめて受け入れるという意味の。

Kou は京介の言葉に完全に虚をつかれていた。

…ねえ京介、それって今のあたしにはすごい殺し文句だって分かってるわけ？

「…京介のくせに」

「は！？今のそういうセリフ返ってくる場面じゃなかったよな！？」

「うつさい、バカ。だけど…ありがとう」

これからよろしく願います、と頭を下げる Kou に今度は虚をつかれるのは京介の方だった。

だって函館に行くってコンビニに乗り込んできたときでさえ頭下げるなんてなかったのに！

驚愕しながらもそれは彼女の心に余裕が少しでも生まれたからだろうと分かっている。そしてきつと本来、Kou は礼節を守る人間なのだ。そうでなければ会話の中でごく自然に頭を下げるなんてできない。

「…ああ、どういたしまして。よろしくな」

京介も言葉を返すと、Kou がほっとしたように肩の力を抜いた。

もう一回笑ってくんねーかな、と思ったがそんな顔は見られそうになかった。

——そんな経緯で京介の一人暮らしは結局泡と消えた。帰り道、なぜか Kou と一緒に歩いている現状に微妙に落ち着きのなさを感じ

ながら、それでもまだ一緒にいれることが嬉しいという感情の方が大きいのは否定のしようがなかった。——否定するつもりもないが。

これから先、同じくらいの大きさで顔を覗かせるであろう今朝の様な少し乱暴な感情は、精神力でどうにかしてやると固く決意をして京介は家路を辿るのだった。

第15話 家路（後書き）

お待たせしました、今回もまた足を運んでくださった皆様ありがとうございました
とございますm(____)m！

連載はどうしても描写がゆつくりなスピードになってしまっています
ねorz

なんかこう…短編だと短く！短く！と唱えながらやるのでギョツ
となってる感はあるのですが…あれ？自己暗示？笑

前回のあとがきからの短編『モーニングセット』に対して「OK
です」と言ってくれたお優しい方がいまして、あずまは画面の
前で思わずよっしゃ！とガッツポーズ致しました（笑）その節はあ
りがとございます？

コンビニ（タイトルに入っていないのに周囲にも略称はこれを通っ
ているw）は、私のなかではこれでようやく第一章が終わりって感
じです。これから先の展開はまあ…皆さん予想ついてますでしょう
が、あずま大好物的展開になりますね！↑

王道…とまではいかないですがベタな感じが好きな方（笑）、ぜ
ひお付き合いくださいませ♪

第16話 それぞれ（前書き）

後れ馳せながら…あけましておめでとうございます！

どうにか年明け7日以内に投稿することができました（、、（フ
ウ

今回は久しぶりにあの人たちが出てきます。楽しんでいただけたら
幸いです。

そして…今年もどうかどうか、よろしく願いします…！

第16話 それぞれ

「こつち、風呂とトイレ。それからコウの部屋は……」

帰宅後、京介は早速コウに部屋の位置や物の位置を教えていた。

姉と京介が住んでいたアパートは手狭だがリビングとキッチンその他に完全に孤立している部屋が2つあって、京介が玄関に近い側、姉が奥の部屋に住んでいた。その配置になった理由としては「強盗とか来たときどうすんのよ、あたしやかあんたが先に犠牲になつてよね。男なんだから立ち向かえ」というなんとも傍若無人な、しかし頷くしかない姉の発言によるものだった。

一応先に部屋に入って中を覗くと、姉のものは綺麗さっぱりなくなっている。そういえば食器なんかもお気に入りだと豪語していたものについてはあらかた無くなっていたと思い返して、こんな時だけ行動が早い美歌に呆れて軽いため息が出た。

「どうしたの？」

これからコウの部屋になるドアを開けたままでいきなりため息をついた京介を不審に思ったのだろう、コウが声をかけてきた。

「あー、いや。なんでもない。ここがコウの部屋になるところだから好きに使える。ていうかこの部屋だけじゃなくて全部好きに使ってくれていいからな」

告げて振り返るとコウはこくと頷く。

「……ありがとう」

その姿がなんだかやたらちんまりして見えて、妙に可愛く思える。まだ外出着のままで部屋をうるちよろしていたためニット帽をかぶっている彼女の頭を、ぽんぽん叩く。だけれどそれじゃ足りなくて帽子をとって頭をわしゃわしゃかき回してやった。

「……………なに？」

怪訝なコウの声で我に返る。ハッ、今俺は欲望に任せて何を！

「や、悪いなんでもない」

「…なんでもなくていきなり人の帽子とつたうえに頭かきまぜんの？」

「そ、そういう気分の時もあるんだよ」

「苦しい！今の言い訳は苦しいぞ俺！！」

「…ふん、あそ」

「あれ、通じた！？」

いつもの『口撃』が来ると思っていたので拍子抜けしたというのは黙っておくことにする。逆にそれが怪しく思えなくもないが、聞くのもまた怖いのでやめておくに限るだろう。

「ね、入ってもいい？」

彼女の中では今の話はもう終わったらしく、部屋の中を指差す。

まだ肩透かしを食らった気分でああと答えると、じゃあおじゃましますと部屋に入っていた。追い抜きざまに京介から帽子をふんだくっていくのも忘れない。

「あとでバイト行く前に客用布団持ってくるからコウはそれ使えな」

「うん」

「あと…なんかすぐに欲しいものとかあるか？必要ならバイト行くついでにどっか寄って買うけど」

京介の言葉にコウが考え込む。

「お金…」

「ん？」

「家賃、とか光熱費とか。…食費とか。どうすればいい」

「買ってきてもらうのも申し訳ないもん。それにタダで居座ろうなんて思っていないから。」

「どこか弁解するように続けるコウの頭をポンと叩く。

「バイトする気は？」

「ある」

「じゃあ、コウのバイトが見つかってそれが落ち着くまでは気にするな。そのあとはそっからお互いの収入見て考えよう」

「…いいの？」

「年下の女の子から今すぐ金せびるほど困ってないからな」

それにどうせそうなる時期には期限の1ヶ月が経っているだろう。今決めたルールは必要なくなるだろうし、コウはいっぱいっぴいで気付いていないようだがそれでいい。

はい、この話おしまいと最後にもう一度頭に手を置いて部屋を出る。

「荷物置いたらリビング来い。ちょっと遅いけど昼飯食おう」

「…うん」

背後で蚊のなくような返事が聞こえた。

その声が少し震えていたけれど、マイナスの感情からではないことはなんとなく分かったので気付かないふりをした。

その日はバイトがある日で、小澤遼はバイトの前に本屋に寄ろうと少し早めに家を出ていた。

今日は日曜日で、京介と二人でシフトを組む日ではあったが寄り道の時間を考慮してだいぶ早く家は出てきている。

…今日深山バイト来るのかな。

準常連客だった女の子とコンビを飛び出していったのは記憶に新しい。けれどあの日以降京介から連絡は来ておらず、今日のバイトに出てくるかどうかの確証は得られていなかった。

まあ深山はバイト無断欠席なんてしないだろうから多分大丈夫だろう。

そんなことを考えていればいつの間にか目的地である書店にたどり着いていて、自動ドアをくぐった。

この書店は全国チェーンの大型書店で、今遼が訪れているこの店舗はその中でも大きい部類に入る店舗だった。いつも使う店なので配置は把握している。

迷いのない足取りで3階建てのうちの2階に向かうと、目的の本は発売日通りに並べられていた。ほっとしてその本を手取る。

昨今人気が急上昇しているライトノベルだ。ある人物の影響で読むようになったのだが、現在では新刊が出れば交互に購入して読むという暗黙のルールができていて、今回は遼の順番だったのだ。

それを手にとってレジに向かう。

その時だ、雑誌売り場の一角で見知った顔を見つけて遼は思わず立ち止まった。

「新谷」

「おっ？小澤じゃーん」

向こう——バイトのもう一人の同期、新谷^{にいや}だ——もすぐに気づいてお気楽な声をあげる。相変わらず隣には女の子がいて遼も無意識に視線を走らせ、いつもの光景なのでそのまま流す。

新谷はその彼女と二、三言話すと手を振り合ってこちらに向かつてくる。

うわ。まさかこっちに？

「よ、小澤」

「こっちに来られても僕太郎とデートする気ないんだけど」

「だれが好き好んでオマエみたいなのとデートするか！てか太郎呼びマジでヤメロっ」

あいさつ代わりに一言言つと、予想通りの反応が返ってきて面白い。だからいじるのをやめられないのだということを新谷は分かっているのだろうか。

「冗談だよ。さっきの子はまた友達？」

とりあえず噛み付いた新谷は放置プレイでレジに行って戻ってき

たあと、店の外に出ながら質問してみた。答えが分かっている質問ほど無駄なものはないと思うが、それでも遼は聞かずにいられない。

「あー、うんそう」

「相変わらずタラシこんでるね」

「…遼くん、その言い方やメナサイ。俺はさあ」

「分かってるよ。『本気で好きになれる子がいらないだけ』でしょ。探してるんだよね？はい頑張ってる」

いかにも適当な返事に新谷が小澤！と憤慨した。遼はいつものごとくそれを放置プレイしたが罪悪感の欠片もない。

——いつだったか聞いたことがあるのだ。太郎はなんでそんなタラシなわけ？遼のその質問に答えた新谷の言葉を今でも鮮明に憶えているのは、その返事が自分にとってあまりにも規格外だったからなのか。

——俺、ダメなんだよなあ。今度こそって思うんだけど、毎回本気になれないんだ。その事実で自分で気づいたとき、それで付き合っちゃうのは相手に悪いよなあって思って…それから一緒に遊んでる子たちには皆付き合い申し込まれた時点で断ってるんだ。

俺きつと君のこと君が思ってるように大事にはできないよ。友達としてなら付き合っていけるけど、それ以上は多分ムリ。

完全には拒否できないそのパターンが一番残酷だよなとは分かるんだけど、俺にはそれしか言えないんだ。それで去るのも想い続けてくれるのも、選択権はその子にあるんだと思っちゃうとなんかなあ……。

そう言って苦笑する新谷はなんだか痛そうだった。

——だから俺、自分が本気になれる人探してるんだ。みんながこっちに向けてくれた気持ちを、今度はその子にいつぱいまとめて返せたらって思う。

まあ、まず相手見つけろって話なんだけど。

それっきりハイ話は終わり！と切り上げた新谷に遼も何も言わなかった。新谷のその考えに自分が口を挟める余地はないと思っていたし、何よりガラじゃなく物思いに耽っている太郎が傍目から見て面白かったからというのが9割方の理由である。

「それで？運命の人は見つかりそうなの」

「…その言い方されるとなんか嫌だな」

「合ってるでしょ、運命の人」

隣を歩く新谷に言うのと当の本人は眉を寄せた。

「いや…うーん、まあ…そうなのか…？」

「まあどっちにしる太郎に選択権とかないし」

「おい！俺の今の葛藤は！！」

「ぎゃんぎゃん騒ぐ男は見苦しいよ新谷」

「……………」

新谷が口喧嘩に弱いのは知っている。そして自分がこっという言い合いにおいては右に出るものはいないことも。

黙りこくってしまった新谷は慣例どおり放置しておくことにして

——雪が風に混じる歩道を黙々と歩く。その時初めて気づいたように新谷が声を上げた。

「あ」

「何」

「いや、そっかお前今からバイト行くトコなんか」

「やっぱりなんていうか太郎は頭の回転悪いよね」

そんな今更なとばかりにため息をつくと間髪入れず反論が来た。

「俺は頭の回転は悪いけど成績は悪くない！」

「それさらに評価下げるだけだつて気づかないところがまた、…痛いじゃないか」

口では勝てないことを悟つてか今度は頭をはたかれた。仕方ない、背は新谷のほうが高いのだからと甘んじて受けることにする。

「オマエ仕方ない叩かれてやるかつていう心情が表情で透けてんだよ！」

「ああだつて成績は悪くないけど頭の回転は悪い太郎にもわかるようにと思つて」

「おつまえ」

また一つはたかれる。それがおかしくてふつと噴き出すと新谷もつられて笑つた。

「あーあ、小澤に口で勝負挑むなんて馬鹿なことした……………なあ、あれから深山から連絡あつたのか」ふと現実に取り戻されたかのように新谷が呟く。こいつもこいつで気になっていたのだろうと、いや、でも今日のバイトは来るでしようだつて深山だもとと答える、新谷もまあそうだろうなと笑つた。

「あいつ時々ヘンに責任感強いからなあ」

「まあそこがいいところではあるんだけどね」

「だな。……けど、それ仇になつて背負わなくていい他人の荷物まで背負つちゃつてんじゃないかつて時々思う」

そんな心配は自分には全く縁がない部類の心配だが、深山ならありえそうだと新谷は思う。

今この瞬間その『他人』が誰のことを指しているのか——きつと自分たち二人は同じ少女を思い浮べているのだろう。

「あんなさ…明らかにワケありな女の子連れてどうすんだろな。まあ可愛い子だからちよつとうらやましいけど！」

「最後の一言が君のアホっぽさを際立たせてるね。——でも案外、そんな重い問題じゃないのかもしれないし。それに…」

言葉を切ると新谷がそれに？と続きを促した。もう遼の毒舌に突っかかる気はないらしい。

「深山ならそうなくてもそれで自分がつぶれる前に周りに頼るよ、きつと。若しくは、つぶれない。勝算なきや挑まないタイプなんじゃないのかな」

それは今まで一緒に働いてきて感じた遼の京介に対する評価だ。当たっているかどうか定かではないが少なくとも遼自身はそう思っている。

「……オマエよく見てんのな」

「お褒めに預かりありがとう。なんなら新谷に対する評価も喋ってあげようか？」

「イヤうんそれはいいわなんとなく何言われるか分かるから」

ハハハと乾いた笑いで手を振る新谷に視線を送る。残念だ。今なら素直に誉めてやつてもいいと思っていたのに。

「さて、それじゃあ俺もどうせだからコンビ二行こうかな」

「は？何しに」

今日は新谷はシフトではない。思わず怪訝な声が出た。

「何だよ冷たくね！？あの後だし深山がどんな顔してバイトくんのか見たいんだよ。聞きたいことも沢山あるし」

語尾に音符でも付ける勢いで間延びした声を出す新谷に、あ、それは僕も賛成と同意を示す。

「なんだよやつぱり小澤も気になってんじゃん」

「あれ、僕気にしてないなんて一言でも言ったっけ」

「……………」

律儀に考え始めた新谷を置いて遼はスタスタ歩く。

太郎は手のひらで転がせるからおもしろい。京介は俊敏な突っ込みスキルを見せるからおもしろい。

これで3人揃うともっとおもしろいからこのバイトをやめられない。

そんなことを無意識に考えながら、背後から聞こえる小澤待てよ

くという声を聞き流しつつ、遼はバイトへ向かうのだった。

第16話 それぞれ（後書き）

本編に全く関係のない後書きを書いてみる。目指せ時雨沢さんレベルの後書き。（↑多分無理）

えー、私すごく目が悪いんです。普段は？をね。かけてるんですけど。

この前、その？が盗まれたんですよ。うおーい、見えないのなんのつて。カラオケでも画面にへばりつき。せつかくのアニメキャラがばやけてるじゃないかあああああ（泣）と魂の叫び。（安心してください、基本属性は三次元です。見た目は社会に完璧に溶け込んでます、…多分）

そんなワケで赤セルフレームの？盗られて悔しかったので黒セルにしてやりましたみたか！（↑？）

まあだからなんだって話なんですけど…赤セル買って1ヶ月も使ってなかったんですよ泣

そんなわけで後書き終わります（え）

そういえば京介たちが住んでいる場所は私の中で雪はふるけどあまり積もらない場所です（どこだそれ…）皆さま自由に想像を膨らましてください！笑

それでは今回は失礼いたします。次回またお会いいたしましょう（

・、・、）／

第17話 ごはん【前編】（前書き）

うわぁごめんなさいなんだかお久しぶりです！言い訳はできる立場ではないと分かっています！…と、とりあえず本文の方を2話続けてどうぞっ。

第17話 ごはん【前編】

二人の思惑など知る由もない京介は、いつものシフト通りで特別休みとったワケでもないのになんかバイト久しぶりな気がする……とかなんとか思いながらコンビニのバックルームに足を踏み入れた。もう習慣になっているおはようございますを言いながら奥に進むと、そこに今日はいないはずの新谷がなぜかいて驚く。

「よー深山」

そう挨拶する新谷の顔がニヤニヤ笑いで癪である。

「……なんだよ新谷なんているんだよ」

「おーおー挨拶だなあ。この前オマエがいきなり抜けた後フオローしてやった俺様にお礼の一つもないのかあ」

こいつうつせええええ！

心底思うが世話になったのは事実なので「……悪かった、ありがとう」と礼を述べる。次いで新谷が座った椅子——そもそも出勤日でもない太郎がここでふんぞり返っていること自体がおかしいのだが——の、隣に立つ遼にも頭を下げた。

「遼も……助かった。おかげで」

「うん、おかげで？」

めったに見せない笑顔で遼に聞き返されたために気がつく——
口が滑った。

コウとのことを言うつもりは当分ない。

「あれ？深山続きは？聞かせてくれないの」

いつものポーカーフェイスに戻った遼を見て内心汗を拭う。うつかり暴露するところだった、コウとの旅を。それでどんな結果になったのかを。

「残念、正気に戻っちゃった」

「これだから理性強いやつはつまんねえよなあ」

などと勝手なことを言う太郎には反射で噛み付く。

「少なくとも理性がなさすぎるオマエに言われる筋合いはねえっ、つか今日はなんで遼までグルなんだ！」

やっと日常に戻ったと思ったらこんなか！という憤りも手伝って遼にまで突っかかるがまあそこはそれ、遼であるため飄々としたものだ。

「僕もあのあとどうなったか気になるのは気になるし。まあどっかの誰かサンミたく恩着せがましいことは言ったりしないけど」

「遼くん？ちよいちよい、ソレ誰のこと言ってるのかな」

「改めて言っしてほしいなら言ってもいいけど。それで深山、行って正解だったの？」

コウのプライバシーに関するからと、何も情報を出していないにも関わらずニアピンな質問をしてくる遼に一瞬言葉が詰まる。

けれど正解だったのかと聞かれれば迷うべくもなく答えは決まっている。

「ああ、正解だった。それだけは確実だ。…って少なくとも俺は思ってる」

コウもそう思ってくれていればいい。願って、同時にきつと思ってくれているだろうという自負もある。そう思える根拠を京介は持っていた。

今日ここに来る前の遅い昼ご飯と一緒に食べているときのことだ。コウは京介が作ったオムライスを食べながらまたポロポロ泣いた。

「え、ちょ、なんでいきなり泣く！まずかったか！？俺の作ったオムライスがそんなに泣くほどまずかったのか！」

焦って尋ねれば返ってくるのは否定の言葉で、

「……………ち、ちがう」

「じゃあなんで！」

確かに泣きたいときは泣けと言った。
だけど今か！今なのか！

「……………っ」

「コウ、」

「ごめん…今泣くのやめるから…」

違う。俺は泣くのをやめてほしいわけじゃない。

手に持っていたスプーンをテーブルに置いた。

——俺はただ。

「コウ、違う。さっきも言っただけど泣きたいときは泣いていい、それは本心だから。ただ……俺、なんでオマエが泣いてんのか分からないままなんもできないのが嫌なんだ。泣いてるコウをただ見てたくない。俺にできることがあればなんかしてやりたい、それでコウが笑顔になるならそれがどんなちっちゃいコトでも」

涙を止めたいわけじゃない。ただ、年相応に屈託なく笑う彼女が見たい。それだけだ。

勢いのままに言っただけで恥ずかしくなる。…なんかすげえ気障なこと言っただけか俺。

「いや、まあだから…」

「……………」

「——言えよ、思ってること。なんでも聞くから」

恥ずかしさをこまかすために、とって付けたようにそう言ったことがコウにバレていなければいい。

コウは潤んだ目もそのままに俯いて小さい声を出した。

「……………お、」

「ん？」

「おいしいの。京介が作ってくれたオムライスがおいしいの。…べつに高級食材使ったわけでもないオムライスだけど…今まで食べたオムライスのなかで一番おいしい」

泣いても口の悪さは健在らしい——一言余計だ。

けれどコウは鳴咽を漏らしながらまた一口スプーンを口に運ぶ。

「ありがとう……」

「えっ」

泣きながらもオムライスを食べるコウのその涙は、悲しさからではないとしつかり判明して安堵した京介は完全に鑑賞モードに入っていた——嬉し泣きするコウもなかなかかわいいかと思ってしまったのは秘密だ。

そんなわけできなりの謝辞に驚く。

「な、なんだよ……今さら、べつにお礼なんか」

「今……言いたくなったの。誰かと一緒にご飯食べるのいつ振りだろうって考えてたらちよっと……」

うるつと来ちゃった。……思い出したよ、誰かと食べるのって独りで食べるのより全然おいしいものだったってこと。

そう言ってコウは笑う。あ、笑った——2回目。

京介がそんな数を数えているなんて想像もついていないのだろう、コウは答えない京介の代わりに沈黙を埋めるように呟いた。

「……でも、お母さんが作ったオムライス除いたらの話だから」

俯いてぼそつと言うコウの頬が微かに赤い。京介は耳が赤くなるタイプだが、なるほどコウはオーソドックスに頬が赤くなるらしい

——そんな埒もないことを思っではっとする。

だから！思考の横滑りはこれから同居する以上危険だからやめろって自分！

そんなわけで、なんだか珍しくしおらしいコウのこれ以上猫っ可愛がりしたくなる一面を見せられる前にとそそくさとバイトに出てきた次第である。

出がけに布団を出してやって自分は遅くなるからオマエは早く寝るよとは言ってきたが——傍若無人な割には妙に礼儀正しいところもあるコウである、居候初日で家主より早くは寝れないと起きている可能性も充分考えられる。

今日はなるべく早く帰らなきゃなー。
などどつらつらと算段しながらバイトに出てきて、今に至る。

「出会った頃に比べたらすげえ邂逅っぷりだよな……」

「え？なんだって」

率直な感想は無意識に口に出ていたらしい。遼に突っ込まれて、だが頑として平静を装う。

「や、悪イなんでも。とにかく、もうこの前みたいなことはないから」

これで勘弁しろと話を畳んだ。

「ああうん、まあそれはまったく心配してもなかったけどね」

「……あ、そう。それはどうも。てか新谷、オマエもう帰れば？俺らもう出勤するし」

いまだに用もないのに居座る新谷に視線をやって告げると言われた本人はがなりたてる。

「なんだよ！俺あからさまに邪魔者扱いかよ！」

「いやーべつにこの前のドタキャン代わってやった貸し使ってオマエが出るってんなら帰らなくてもいいけどな？」

サイズが同じユニフォームをずっと差し出せば、う……と新谷が顔をしかめる。

「冗談だよ。それはまたいざって時に使わせてもらう。さ、出るか遼」

無駄口たたきながらも準備はもちろん済ませていて、京介と遼は揃ってバックルームを出た——出ようとした。

「おい深山！」

「なんだ？」

新谷の呼び掛けに素直に止まらなければ良かったなんて後から思ってももう遅い。

「言つとくけどな！俺はオマエがあの子にやましいことしてないなんて信じてないからな。出てったときより妙にすっきりした顔して帰ってきやがって、まるであの子と一発ヤツ」

それ以上は言わせるかあ！！

京介はかつてない俊敏さで新谷の口をふさぎにかかった。

「馬鹿オマエふざけたこと言ってんじゃねえ！！つかそういう話してなかっただろ今まで！単にオマエがメールで好き勝手言ってただけで！」

「ふるへー！はわへるほほろはほへいはやひい！」

「はあ！？何言つてつか全然わかんねーよ！てか遼、オマエも爆笑してんじゃねー！！」

ああもうなんでこんな事態になった。自分でも危惧しているところ——あくまでこれから先のことで過去の事実では断じてない——をよりにもよって太郎に指摘されるなど。

このとき京介は決意した。——こいつらには絶対、一生、何があっても、コウのこのことは言つてなんかやるか！

その後言い合いを続ける二人と笑いがとまらない一人は、日勤帯の店員仲間に注意されるまで現状を維持していた。

第18話 ごはん【後編】

泣くつもりなどなかった——少なくとも実際に二人でオムライスを食べるまでは。

『ちょっと遅い昼ご飯』を作ってくれと言って部屋を出ていった京介に、母がいた頃を思い出してまた涙ぐんでしまったことは多分バレているのだろうなと思いながらコウはほとんどない荷物を肩から降ろした。そうして脱力したように床に座り込む。

…京介からしたらふつうの会話だったかもしれない言葉に泣きそうになった。不覚だ。

そこには突っ込まず去った京介だが、思わず泣きそうになってしまったのには実は理由がもう一つ。

バカ——ほんとバカ。あたしがあんたの考えてることに気づいてないとも思ってるの。

分かっていたのだ、京介が優しさからコウに経済的なことは気にするなと諭してくれたこと。

京介は確かにバイトはしている——しかし場所はいつだって最低賃金がデフォルトのコンビニで、他の職種に比べたら絶対給料は低いのだと思う。旅をしている間の使うべきところには使う様

子を見ていると実際に困らない分の貯金もあるのだろう。

…それでもだ。赤の他人のコウがタダで居座っていい理由にはならないとどうしても考えてしまう、例えば京介本人が気にするなど言ってくれていたとしても。

部屋を出て、リビングまで向かう短い道のりで急速に不安になった。

あたしはほんとにここにいていいのかな。迷惑じゃないのかな。

京介はあの時コウの申し出に対し居候を許可してくれた。だけれどコウにはそれが本当に心からの許可なのか分からないのだ。

散々面倒をかけてきた年下の子をほっとけなくて仕方なしにいいよと言ったのかもしれない。

そう思うほど京介のもとへ行くのが怖くなる。

だめだ、これ以上めんどくさいトコ見せちゃ京介にまで呆れられる。

恐る恐るリビングに入れば、いい匂いがして思わずゆっくり息を吸い込んだ。

「おっ、コウ！見るよこの卵」

「は？」

難しいことを考えていたコウのマイナス思考を吹き飛ばすような、言っちゃ悪いが能天気な声が聞こえて思わず怪訝な声が漏れた。

ああまたあたし、こんなつつかかるような言い方。

後悔するが当の京介は気にした様子はなくてほっとする。

「すごいだろ？めっちゃうまくできた」

そう言ってローテールの上に乗かれたのは、半熟卵で包まれたオムライスだった。うまくできたと言っているところを見ると、普段はおそらくこんなふうによく半熟にならないのだろう。

「出来たから食べよう。ごめん、うちダイニングテーブルとかないからローテールに向かって座んなきゃいけないんだけど」

言いながら、さりげなく可愛らしい座布団を出してきた。

実は部屋に入れてもらった時から思っていた——女物、多い。

洗面所のコップとか。トイレのマットとかカバーとか。あたしにあてがってくれた部屋にもちよつと、女物の小物がちらほらあった。そこに気づけばなぜかショックで、少しだけ気分が落ち込んだ。

——なんで？べつに落ち込む立場じゃないんだからあたし、居候の身で。

ふるふると頭を振って正しくないと思える感情を振り払えば、準備が出来て目の前に座った京介になんだ？と突っ込まれる。何でもないと答えておいた。

「……いただきます」

「おー、喰え喰え」

目の前の京介お手製のオムライスに、ありがたくスプーンを伸ばす。そのスプーンもさりげなく可愛い代物だ。無意識に膨らむ感情は言葉通り意識しない。

オムライスはおいしかった。京介と一緒に食べながらどうでもいい世間話——バイトめんどくさいけど行かないわけにいかないだの、そろそろ部屋の掃除しないといけないだの——をしながら、コウはそれにたまに相槌を打っただけだった。

けれど誰かと話をしながら食べるご飯は、よく今まで一人で三食食べてきたと思えるほどおいしくて、しかもそれが母が元気だった時から随分時間が空いていることに気づくともう涙は止まらない。

コウはオムライスを食べながらぼろぼろ泣いた。また嬉しいことを言っただけなのに、そのままのコウを受け入れてくれる京介に、ますます涙が止まらないのは不可抗力だ。

その後京介は慌ただしくバイトに出て行って、その際布団も部屋に置いていってくれた。22時にバイトが終わって、帰ってくるのは23時位になるから先に寝るとは言っていたけれど……。

コウは一人になった家の中を見渡す。どうしよう……寝るまですることない。

現在時刻は午後5時過ぎ。京介が出ていってから1時間と経っていないかった。

今は…学校も休んじやつてるから課題もないし。ああそうだ、学校どうしよう…いつまでも休んでられない。

そうは思いながらも心はそれを否定する。

まだもう少し。ここでエネルギーを蓄めていたい。そのためにも、だ。

何か京介の為になることをしようと決意して、コウは部屋を見回すのだった。

少しでも早く帰ろうと思ったときに限って仕事は長引くものである——京介は部屋へ向かう共同通路を歩きながら舌打ちをした。

コウはちゃんと寝てくれただろうか。腕時計の短針は限りなく12に近い場所を指し示していて、退勤が遅くなっただうえに自分を引き止めた新谷にイライラの矛先が向いていた。

あいつと話してるとほんとろくなことねえ！

コウがどーした、そんな話ばかりでさらにフラストレーションは溜まる一方である。

——自分が好きな奴のことそう易々と人に喋れるか。

口は閉ざした。何の情報も与えてはいないはずだ。

自分で持っている部屋の鍵を差し込んで、家に入る。居間に電気が点いていて、一瞬やつぱりかと思った。だがいざ居間を覗いてみると予想は打ち砕かれていて、コウは確かに寝ていた——ローテーブル近くに置かれた広くはないラブソファに転がって。

それが京介を動揺させる火種になった。

旅の中では拝めなかった無防備な寝顔、小さな唇から漏れる寝息は微かなはずなのにやたらと耳朶に甘く響く。忘れがちだが、そういえばコウは童顔ではあるが——最初の頃完全に高校生だと思い込んでいたため少なくとも京介の中では童顔である——顔の作り自体は綺麗だったことを今更ながらに思い出す。

そして京介的に一番やつかいなのは脚の曲線だった。ジーンズを穿いているからまだいいが、これがスカートだったらと思うと空恐ろしい。

一緒に住むってこういうことか！

気付いて一人耳を赤くする。

だめだお願いだから負けんじゃねえ自分。

振り切るようにコウに近寄った。

やっと眠れるようになった彼女を起こすのも忍びないので姫抱っこで持ち上げる。誰にもなく寝てる奴を運ぶにはこれが一番ラクだから仕方なく！と弁解した。

腕にあたるオンナノコ特有のやわらかさは意識しない。意識したら——それこそ負けだ。

元姉の部屋、現コウの部屋に踏み入り、どうやら布団だけは敷いて準備したらしいそこに身体を努めて優しく横たえる。

「ん……」

擦れた呻き声がコウから漏れて過剰反応。

京介は掛け布団も肩まで引き上げてやり、急いで部屋を出た。

洋服のまま寝るのは休んだ気がしないだろうが着替えだけは勘弁しろ！

再び誰にもなく弁解して、自分も床に着くべく準備を始めるのだった。

そうして部屋の中を歩き始めて気付く。

「……………うん？なんか部屋やたらと綺麗になってないか？」

寝間着代わりのジャージに長袖Ｔシャツという姿で、電気を消そ

うと移動してきたリビングに片膝をついて座り込みフローリングにまじまじと視線を送った。

「……やっぱり綺麗になってるな。なんで」

言い掛けて、いやコウしかいねーかと一人得心する。ふいに昼間の自分の発言が頭をよぎる——「ご飯を食べながら世間話の一環として部屋の掃除がどうか言った気がしないでもない。」

「まさかそれで？」

そうだとしたらなんて律儀で行動が早い。驚くと同時にもう分かる。これはきつとコウなりの感謝の示し方なのだろう。

あいつ——口は素直じゃないくせに行動は素直なんだな。

日中京介がいない間にせっせと掃除に励むコウを想像して、ふつと笑いが漏れる。リビングの電気を消して、自分の部屋に戻る前に結局もう一度だけコウの部屋へ向かった。

細心の注意を払い静かにドアを開け、コウの枕元まで近寄り膝を折った。熟睡している彼女の顔を隠す髪を耳にかけてやり、それからその頭を優しく撫でる。

「——ありがとな」

決して起こさないように小さな声でお礼を告げた。寝顔を見ながら願う——これからはどうかいい夢を見てくれればいい。

「おやすみ、コウ」

囁いて、極力を音を立てないように細心の注意を再び払いつつ、京介は今度こそ自分の部屋へと足を向けたのだった。

第18話 ごはん【後編】（後書き）

というわけでして…、すっごく久しぶりの更新は同居から初めてになる二人の食事でした！

長いこと味気ない食事をしていたコウにはこれは欠かせないイベントだろうと筆をとったんですが…自分遅い！ほんとと申し訳ないです！

時雨沢さんレベルの後書きどうかの前に本文のレベルをあげるやコラア。㇏ って話ですね！！

時々執筆の為のエネルギーがすごく減る時があるんです、そんなときはひたすらキャラが『降りてくる』（↑あずま的一種の現実逃避ですスルーしてください）のを待つんですが…そんな状態になっても書くのを絶対やめたくないと思うのは読んでくれる皆様のおかげです。

というわけでこの場を借りてお礼を…！

ならりん様、ぱっち様、武智舞様、泉様、黒田 あきら様、しょう様。

貴方様方がお気に入り登録してくださっているおかげでこの小説は続いていると言っても過言ではありません。なかでも何人かの方は初期から登録してくださって、その存在にほんと助けられたことか…！本当にありがとうございます。

また、コメントを一度でも残された方、コメントなくとも一読もしてくださった方、すべての方に余すことなく感謝を！

ゴールテープを切るまでは決して倒れません、それまでどうかどうか引き続き応援よろしくお願い致します。

だけでもやっぱり感想評価いただけたら小踊りしちゃうなー…なんて最後に厚かましいお願いをさせていただきます！、今回は失礼させていただきます！

また次話でお会いいたしましょう♪

第19話 スタートライン（前書き）

皆さんご無沙汰してます。まずは先日の大日本震災で被災された皆様にお見舞い申し上げ、亡くなられた方々のご冥福をお祈り致します。

私は今年で21になるんですが、今まで生きてきたなかで本当に一番ひどい災害でした。

私は青森県に住んでいるのですが、実は青森も報道には出ないものの結構な被害があり、改めて本当に文明に頼りすぎた生活をしているんだなあ実感しました（個人的な環境としては家が凄く古いのもとからなくなる文明がなく大打撃は受けなかったのですが）。

震災直後から私の敬愛している作家さんが、「被災地の人達の暮らしをニュースで見るとふつうの暮らしができている自分達に罪悪感を感じて暗くなってしまうが、そうではなくて支援する側が元気でなければ被害にあった方々を元気にしてあげることはいけません。だからまずは自分が元気で健康であって、それから自分ができることに取り組むことが大切。そのためにはまず経済を回すためにみんなふつうの生活をしましょう」「みたいなことを震災後2日とかで仰っていて、ああその通りだなあと。

だから本いっぱい買ったり福島県産の野菜とか買ったり義援金に参加してみたりしています（↑単純）

日本全体的には段々状況が落ち着いてきているので（勿論被災地の方は今もつらい状況なのは重々承知です…そのうえで自分にできる

ことにも参加しています）そろそろ小説のほうも更新しようかなと
思います^^

ほんとに亀更新ですが今回もまたどうぞお付き合い下さい。

第19話 スタートライン

—— 声がする。聴きたくもない声が。どうして人は自分を悪く言う声にこうも敏感になれるのだろう。

絶縁してるんだから他人の子だ、とか。親も親なら子も子だ、泣いてもないし情がないとか。

アンタ達にあたし達の何が分かるの？母がどれだけあたしにとってかけがえのない人だったかなんて、あたしにしか分からない。あたしがどれだけ母の存在に助けられていたかなんて、アンタ達には分からない。そしてその逆も。

けれどそれを声に出すのさえ悔しい。だからコウはただ黙る。表情にだって感情は出してやらない、そう決めた。

だけれど、この世を去った母を侮辱するのだけは許さない。それを言ったらあたしがアンタ達を殺してやる。

あの頃コウは、本気でそう思っていた。

—— 場面が変わる。引き取られた先の祖父の家の、自分にあてがわれた部屋で陽が落ちても電気も点けずにただうずくまっている。この頃はそうだ——泣きたいけれど泣いていることを祖父に気付かれるのがいやで泣くのを我慢していた頃だ。そして泣き方を忘れ——誰とも話さず、学校にも行かず。この時期が原因でコウは今でも暗いところがあまり得意ではない。暗さに付随して芋づる式に様々なことが脳裏をよぎるからだ。

—— また場面が変わる。函館へ行こうと決心して、半ば強制的に京介を連れ出した時だ。

また変わる。京介が言った。

—— 俺にオマエの心配くらいさせてくれ。

—— 感情を殺すな。そのまんまのコウでいろ。

—— 泣きたいときは泣いていい。

—— 言えよ、思ってること。なんでも聞くから。

肩の荷が降りた、とかそんな表現が正しい気がする。京介と出会って色んな言葉をもらって何より泣ける場所をくれて。

母がいなくなってから渴望していた、話を聴いてほしいとか、黙って傍にいてほしいとか、自分の存在を無条件で許してくれる人の傍にいたいとか。そんな願いはあっさり叶った。

そうして、自分は今。

はっ、と目が覚めると見慣れない天井だった。一瞬訳が分からなくなつて、そのあとすぐに京介の家に居候を始めたことを思い出す。

同時に何やら胸くそ悪い夢を見たことも思い出し——どうやら人は原因である環境を変えたからといって、すぐにでもそれが結果に繋がるわけではないらしいということが分かった。

だが間違いなく結果に繋がっている部分もある。過去何度もそうだったように、目が覚めても気分が最悪だと感じる事がなかったのだ。

分かり切ったことだがそれは夢の最後に出てきた京介が関係大アリなのだろう。

ふ、と鼻で笑う。…自分はもうアンタたちの夢を見たくらいじゃ落ち込まない、ざまあみろ——などと顔も覚えていない親戚に向かって何がまあなのか自分でも分からないうちに胸中悪態ついた。それですっきりしたため布団からむくつと起き上がる。

「えーと、今何時だろ。てか京介は…」

気を取り直して携帯を確かめると時刻は10時だった。

「……………」

ふうん10時、と流そうとして——その時間に驚いた。嘘だ。ちよっと待て……寝るのが難しくなっていたくせに京介の家に来た

とたん昼前まで爆睡とは。

分かりやすい自分にほとほと呆れる。意味もなく恥ずかしいがそれを顔には出さない、見られる相手もこの場にはいないのであるが、いない——うん？

耳を澄ましてみて気付く。家主の気配が扉の向こうに感じられない。シンとした家の気配に以前の自分がデジャヴする。

一抹の不安がコウの胸をよぎった。

起き上がって恐る恐るリビングに向かうと、昨日ご飯を食べた口ーテーブルの上に一枚のメモと、鍵らしきものがあるのが目についた。

書き置きだ。取りあげると、男性にしては綺麗めに分類できるであろうしかし大雑把な字で、

『おはよう。大学1限からだから行ってくる、ご飯とか好きに食べて。キッチン引っ掻き回すことを許可する。あと、使ってない合鍵あるから預ける。出かけるなら好きに使い。』

——あからさまに走り書きだ、寝坊でもしたのだろうか。

許可するという言い回しに京介っぱさが窺えて、コウは知らず笑いが漏れた。同時に置き手紙の存在にほっとしている自分に気づく。『もう、なんだかな』

これ、絶対あたしが一人で家にいると不安がると思って気いきかせたんだろうな。

家を出る直前に慌てて紙にペンを走らせる京介が眼裏に浮かんだ。労られているような庇護されているような、そんな感覚が心地よくてむず痒い。だけれど同時に貰っているものの大きさに目が眩みもした。

あたし——本当に京介に助けられてばかりで、自分自身は何か返せるのかな。

返せるだけの何か——持ってるのかな。

不安だ。不安だらけだ。だけれどコウはもう分かっちゃってしまっている。

京介の隣は居心地が良すぎて当分離られない。と、現時点では思う。というか自分が離れようと思う日が来ることが考えられない。だけど期限はあった。自分が二十歳になるまでの1ヶ月。その時が来たら自分はここを出ていかなければならないし、それまでに生まれ変わった自分になって手を差し伸べてくれた彼に返せる何かを見つけて返す。

だけどそれが何かは今のコウには分からない——だから昨日の掃除はその手始めのつもりだった。京介が喜ぶこと。それをコウは知りたいと思っている。

無意識に今手にしたばかりのこの部屋の鍵を握り締める。

「……よし」

何はともあれ自分を変えるための行動を起こそう。決めて、それから出かける準備を始めた。

洗面所で一通り朝の準備を終えて、ご飯は許可をいただいたキッチンで食パンを見つけたのでありがたく頂戴する（ちゃっかり苺ジャムももらったがこれも許容範囲だろう）。

てか苺ジャムってオンナノコかよ！と思わず突っ込んだのは内緒である。

ついでに冷蔵庫の中身をチェック。レタス、卵、キノコ、豚肉——
——なんというか本当に自炊するオンナノコ的なラインナップに——
瞬沈黙した。

「……………」

作ってくれたオムライスがおいしかったのは記憶に新しい。けれど卵を焼いた時の『うまくできた！』という喜びようを見れば、かなり得意というわけでもないのだろう。

それでもこんなに材料揃えるもの？

昨日も思ったことだ。もしかしてホントにしょっちゅうご飯作ってくれるような（だって食材揃いすぎ！）、泊まっていくような（だってあっちこっちに女物）、そんでもって朝ご飯をここで食べていくような（だって大学生一人暮らし男子が苺ジャム常備って……）

間柄の女の子がいるのだろうか。

居たとしてどうするのか。ありのままのコウでこの家に居ていいと言ったのは京介だ。頼みながらも迷惑じゃないかと断れなかっただけなんじゃとか色々考えた。

けれど昨日の京介とのやりとりで、そんなことを思うのは受け止めてくれた京介に失礼だと思った。だからそこは疑わないし、これから前向きにまず自分のことをしっかりしてそして京介に恩を返していこうとそう決めたのに。

——これはちよつと別問題なんじゃ。

というかその前になんで自分はこんなに動揺してるんだとんだか訳が分からないままとにかく冷蔵庫の中身を頭に入れて、財布と携帯、それに大事な合鍵だけを手に持ちコウは家を出たのだった。

外に出てみると予想以上に空気が冷たかった。雪は降っていないが防寒の為に帽子は被ってくるべきだったかと臍を噛む。

寒いじゃんくっそう。

八つ当たりの先は何となく京介だ。だってこの気持ちをどこにぶつけたらいいか分からない。

…それに京介、思ってること言えって言った。

そこはかとなくぶうたれながらコウは駅前の百貨店に向かう。そこそこ大きくて大きすぎない、この町唯一の百貨店だ。

服屋のテナントもレストラン街も入っているし地下にはスーパーもある。大抵のことはここで困らない。

着くまでの道すがら、京介のバイトしているコンビニの前を通ってきたことをふと思い出す。今の時間は京介は学校にいると分かっている、妙に気になって視線を送ってしまうのを止められなかった。

…何時に帰ってくるかなあ、なんて短期間で馴染みすぎているだ

ろうか。

とにかく気分を切り替えてやることやらなきゃと、思考回路を現在に戻して目当ての店に向かう。

向かった先はテナントの一つ、1年365日アルバイト募集している某有名ハンバーガーショップである。

「あの、すみませんここでバイトしたいのですが…」

コウは意識的に背筋を伸ばす。自分がんばれ——これがあたしの新しいスタートの一步目。

「え、もうバイト見つけてきたの？」

夕飯の食卓で、コウは京介の言葉に箸をくわえたままコクンと頷いた。

「…行動早えなオイ」

もつとゆっくりしろよ…と呟いたのはコウに聞こえない声でだ。

「え？」

「いやなんでも。…すごいじゃん、何のバイト？」

ちなみに今晚の食卓はコウが作るという主張を押し退けて、京介が大学から帰ってきたあとにさっさと作ってしまった豚肉とキノコの炒め物だ。それがふつうにうまい。

コウとしては朝のことがある食材を使つてのメニューだから少し複雑である。

——何のバイト？聞かれて一瞬つまつた。

「わ…笑ないですよ？あの…ありきたりすぎるかもしれないけど、

……ハンバーガー売る、赤いイメージな店」

京介も一瞬沈黙する。——あの店でいらっしやいませとか言う

コウ？

「ごめん、想像できん」

「う、うるさい。あたしだって一大決心だったし。だって今回はとにかく早く見つけたかったから…。その、京介に…今日報告できる何か、作りたかったんだもん」

尻すばみな声でそう言うコウにどうにも愛しさがこみあげる。

素直じゃないし口は悪いし手よりも先に足が出る。そういうところは出会いから少ししか経っていなくても嫌というほど知っている。そしてそれを上回る健気さも。

そんなところがマイナス部分を帳消し、それどこれかギャップになって可愛さ上乘せだ。

…ってこれは俺個人の好みの問題か。

縮こまるコウを見ながら思案する。

目をあわせて微笑んで頭を撫でてやって。そんなことをしてやりたいと思う。けれどここでそんなことをしたら飛んでくるのは足か拳かはたまた箸か。

というかそもそもそんな自らに試練を課するようなことは極力避けたい。

「そつか…、良かったじゃん頑張ったな」

「ん」

コウは満足そうに頬を染めて頷いた。

「あ、それから昨日掃除もありがとう」

「え…。き、気付いたの」

どこかバツが悪そうに言うコウに京介は首を傾げた。

「そりゃ、普段住んでる家だし気付くだろ。なんで？気付かれたくなかったみたいな物言いだな」

「だってなんか—— 恥ずかしいじゃん。こっそりやったのあとから指摘されるとさ」

「…そうか？ま、俺は嬉しかったよありがとう」

笑ってさらりとお礼を言われて、コウは体温が上がるのを感じた。

そんなふうに言われたら——もつと頑張っちゃおうとか思うじやん！

二の句がつげなくなつて黙々とご飯を口に運ぶ。 なんか氣イ悪くするようなこと言つたか俺、とか考える京介も大概鈍感だがそんなことはお互い氣づかない。

「てかさ……」

コウが再び口を開いた。彼女が京介と話す時、身長差の問題で（もちろん座高もだ）上目になるのは必然で、京介はそれにいちいちドキツとさせられている。

「な、なんだ」

「あたし……いいの？」

「は？何が」

「や、だから……」

彼女、いるんじゃないの。ここにいて大丈夫なの。その問は口の中でもごもごと音にならずに消えた。

だってそれで『いる』、『実は大丈夫じゃない』なんて答えが返つてきた日には——自分はまた一人になつてしまう。

期限つきではあるけれどようやく見つけたあたしの場所。

お願いだから、奪わないで。

「……………なんでもない」

「は、いいの？」

「うんいいの」

結局聞けなかった。だが今はまだいい。それでいいことにコウはした、たとえ胸のどこかが正体不明に痛いとしても。

もしもそれで京介がこの先彼女と喧嘩したりすることになるなら

——その時はあたしも彼女と一緒に怒られよう。 などと若干見当違いな結論を出して、コウはごちそうさまと手を合わせるのだった。

——その後「思つてることなんでも言えつて言つたよな」とどうにか言葉の続きを引き出そうとする京介に追い詰められて、さら

にそれをガードし続けたことは余談である。

第19話 スタートライン（後書き）

お疲れさまでした^^

さて！あずまの違う作品の宣伝を。

「マジで恋する5秒前」シリーズをちよつと短期連載っぽくアップしていこうかと思えます。明日か今日か…近日中に始めます！
よろしければそちらの方もよろしく願います。

第20話 読書欲に食欲が勝ったという話。

「こんちわーっす！せーんぱいつ」

「あ？ああなんだおまえか」

平日の昼、講義が午前で終了していた為久しぶりにサークルに来ていた京介に明るい声がかかった。声の主は後輩の坂下まみだ。いつぞやの過去問は少し前に渡していて、果たしてそれで本当に勉強するのかと京介は疑念を抱いている相手でもある。

「なんだおまえかって失礼ですよ！」

「別に他意はねえつつの。で？本読みに来たのか」

「あ……、はい、まあ。わ、私だって一応本好きでここ入ったわけですから」

一瞬口籠もってまみは答える。それからさかさかと本棚に近寄ると、文庫本やハードカバーの中から漫画を取って読み始めた。

本好きで入ったって言ったその直後にファーストチョイスが漫画かよ！

と思いつつ実のところ京介も漫画は好きなので声に出しては突っ込まないが。サークル室内に設置されている椅子に座って読書を続けるまみの、斜向かいに陣取って京介も小説を開いた。

ハードカバーの手触りが心地よい。活字の羅列が京介を飲み込む。――そのまま物語の中に入り込もうとして、入り込めなかった。

主人公の少女がどこかコウに似ていた。そして相手役の男の性格もどことなく自分に似ている。…こんな時に限って選んだ本は恋愛小説だ。

「~~~~~」

なんだこの激しく羞恥プレイさせられているような感覚はっ。

今さら心中ジタバタしてももう遅い。頭のなかは今バイト先の店にいるであろうコウのことでもいいになった。

彼女がバイトを始めたのは少し前で――同居するようになって

からは合計一週間が経過している。

最近のコウはバイトをじゃんじゃん入れてがつつり働いており、
「……………きつと出てくとき耳揃えて返すつもりなんだろうなあ」

「え？何かいいました」

「いや、なんでも」

本から顔をあげた後輩に気にするなと意味をこめて手を振って、
また漫画に戻った彼女に倣って自分も視線を本に落とした。

活字で生かされた主人公たちは、今幸せそうに二人揃って同じ時間
を過ごしている。

——それが無性に腹立だしくて羨ましい。

コウは今日もバイトだと言っていた。

会いたくなつた。こいつらのせいだ。

責任を物語のキャラクターに転嫁して、京介は椅子から立ち上がる。
そのまま本を鞆にしまい込み始めたのを見てまみが虚を突かれた
ように目を見開いた。

「もしかして帰るんすか！」

「あー…うん、帰ることにした」

「…な、なんで」

なぜか歯切れの悪いまみの言葉に答えを逡巡する。

「——ハンバーガーが食べたくなつたから」

「はああ！？」

疑問の声を上げた後輩にそういうことだからじゃあ、と別れを告
げてサークル室を出ると、京介は早足気味にコウのいる店がテナン
トになっているこの町唯一の百貨店に向かった。

そついえば一度は働いているコウを見てみたいと思っていたから

ちょうどいい。

などと自分自身に言い訳をしながら店に入るとすぐに目当ての人物を見つけた。

意外に愛想のいい笑顔で接客をしている。どうやらレジ係らしい。今の時間レジに入っているのはコウ一人らしくそこには2人客が並んでいた。京介も倣って最後尾につく。

前の客の男性と、お釣りの受け渡しで手が触れ合っていたのが嫌だった。が、そこは流すことにする。言える立場でもない。

「いらっしゃ……京介ッ」

マニュアルどおりの接客をしようとしていたコウが京介の時には崩れたので、それで勝手に溜飲を下げた。

「よ。おつかれ、意外にちゃんと頑張ってるな」

「…意外にってなによ」

「や、接客で愛想笑いか…？　そういうの苦手分野だと勝手に思ってたから」

なんせ出会ってから今まで笑顔を見せてもらえたのは2回だ。

コンビニ店員と客時代で直接の知己でなかったときさえ愛想笑いは見えていない。

——それって逆にすごくないか。うわ、なんかへこんできた。

「ねえ、京介注文は？　来たからにはなんか食べに来たんじゃ」

「へ？……あ、ああ」

言われて吃^{ども}った。一番の目的はコウに会うことで、京介の中でも昼食をとつてないとはいえ食事は2の次だった。がしかし選ばないわけにはいかないだろう。

「そうだな。じゃあ」

カウンターにあるメニューから選ばうとしてふと顔を上げる。コウと目が合った。

「どしたの？」

「いやなんか、」

「ん？」

「——店員と客って意外に距離遠いのな」

コウもこんなカンジだったのか、と問おうとしてやめた。

ちよつと微妙な発言だったかな、と思いつつ彼女の反応を待つが、返答は一向に來ない。

「……コウ？」

「——……」

「コウ」

「……うん、分かってる。遠くなきゃいけないんだよね、本当は」
そう言つて泣き笑いのような表情をした。

あ——やらかした。

そう思つても一度口から出した言葉は戻せない。

違う、そういうことを言いたかつたんじゃない。俺は、

「あ……またお客さん來た。京介、ふつうにハンバーガーのセットでいい？」

「……ああ」

言おうとした言葉は続かなかつた。

遮るようにコウに注文を確認されて、京介に弁解の余地は与えられなかつたのだ。

……弁解で。俺は一体何を弁解して何を言おうとした。

「しつかりしろよ俺……」

角の席でまみに言つたとおりにハンバーガーを食べながら苦虫を噛み潰す。

オプシヨンでテーブルに突つ伏していたが、それを注意しに來るような無粋な店員はいなかつたのは幸いだった。

その夜のことだ。

「明日から学校に行こうかと思う」

「へ」

「ご飯のあと2人でテレビを見ているときにいきなりそう切り出したのは、京介の横でソファアの上に体育座りをしているコウだ。

「学校って…大学か。もういいのか？」

ゆっくり休めと言ってコウを家においている京介としては、気に掛かるのはそこである。また無理をされちゃかなわない。

「うん…もう大丈夫」

そこまで言ってから、コウは言葉を切って横にいる京介を見上げた。

「——ハンバーガー買う気もないのに店にまで様子見に来てくれるような誰かさんのおかげでね」

「……！！！」

京介は目を瞪る。

それを確認して、コウはしてやったりというふうに分うと再び画面に視線を戻すのだった。

き…づいてたのかよ！

羞恥で撃沈するが、沈めた本人はどこ吹く風でテレビを見ている。

そしてそれより心を占めるのは初めて目にした、数瞬前のいたずらっ子のようなコウの笑顔だ。

ずるい、と思う。

普段笑顔が少ないやつほど——ただ一度の笑顔でそれ以外をどうでもよくさせるのだから。

「…嬉しかったから」

だからコウの呟いた声を聞き逃したのは不可抗力だと主張したい。

「え？——わり、もう一回」

「2回も言わない。おやすみっ」

「はあ！？」

目を白黒させているうちに彼女はソファアから軽やかに飛び降り

て、自室へと駆けていく。

一瞬だけ見えた横顔は紅く染まっていた気がして。

つつだああああ！？今なんつつたんだよ！？俺の馬鹿野郎！

！誰でもいいから30秒世界の時を巻き戻せ！！

なんて心中叫んでも後悔先に立たずだった。

この日京介はどうか寝付くまでコウのセリフを考えることになるのだが、もちろんコウがなんと言ったのかは最後まで分からなかった。

第21話 三度目の出会い&1t:前>:(前書き)

こんにちは。今回は今までに比べたらちょっと早いUPになりました。

今回もなかなか仲の進まない(笑)二人にお付き合いください。

第21話 三度目の出会い&1t;前>

翌朝——京介がまだベッドで情眠を貪っていると、夢現つの世界に心地よい生活音が届いて目を開ける。

トントン、という包丁の音、何かを焼く油の爆ぜる音。

ぼやけた世界の片隅で、ああなんかこういうのいいなあ…と思う。このままもつと寝ていたい、なんて思うけれどこの音を立てている主と早く会いたいというのも事実だった。

「しゃーねえ、起きるか」

ギシッ、とベッドを鳴らして起き上がり布団類を軽く畳む。そうしてから今日着る服を選び、上半身裸になったところで、

「京介朝ごは——、」

「うおっ!？」

部屋にこのタイミングで入ってきたのは他の誰でもない、コウだ。

裸の京介とかち合ってコウは動きを停止する。叫ぶでもない、頬を染めるでもない、ただ停止。

「お、おいコウ…?」

見られた方はいたたまれない。

せめて何かコメントをしてくれコメントを。

世界が止まったのではないかと疑うほど完璧に停止していたコウは、

「——お邪魔しました」

そう一言告げて踵を返すのだった。

お邪魔しましたっておい。

なんとなく拍子抜けして、京介はまた着替えはじめる。今着替えたところで今日の講義は昼からなのだが、まあたまにはゆっくりご飯を食べて学校に行くのもいいだろう。

そんなことを思いながらコウがいるはずのリビングに向かうと、

彼女はもうローテーブルに着いて何故か俯いて正座していた。

「さつきは悪かった、とりあえずおはようコウ」

そう声をかけると弾かれたように顔を上げる。

「…なんで京介があやまるの、ノックも何もしなかったあたしが悪いし…」

答える声の齒切れが妙に悪い。

「あーまあそうだけど。男の裸なんて見ても面白くないもん見せたかと思つてさ」

「……そつ、」

力いっぱい反論しようかという勢いを見せて、しかしコウは結局口をパクパクさせただけで「——なんでもない」と終わった。

また俯くコウの顔にまつすぐな髪がさらさらとかかる。その隙間から見え隠れする彼女の頬が赤く見えたのは自分の欲目だろうか。

…なんだ、ちゃんと反応してんじゃん。

思わず嬉しくなつて口角が緩む。少なくともちゃんと男と認識してくれている証のようで嬉しかった。

——いや、ダメだろ意識されたらこっちの意識も余計つられて危なくなる！

一人葛藤しながら頭を抱える。心中ウンウン唸っていると、

「ねえ…なんか言つてよ」

「えっ」

「今日ちよつと頑張つて、朝ごはん…ちゃんとおかず揃えてみたんだけど」

言われてテーブルに視線を移せば、そこにはいつもとは違うメニューが揃っていた。朝食づくりはその日早く起きたほうがするというのが自然とルールになつていて、作ると言つても朝はお互いトーストによくて目玉焼き、というのがスタンダードだ。

それが今日はご飯に味噌汁、焼き魚や卵焼きまで揃っている。

「…うまそうだな。どうかしたのか？」

うん、あの…とコウは語り始める。

「今日、久しぶりに学校行くじゃん？」

「ああ」

「ちよつと気合い入れようと思って。それで早起きして、ちゃんにご飯作ってみた。学校また行こうって思えたのも京介のおかげだから……感謝の意味も込めて。だから——」

「うん」

「……味わって食べてくんなきやすねるから」

「はい！？」

神妙な面持ちで聞いていたところにいきなり感情の直球が来た。

「すねっ……すねるっていきなりなんだよオマエ」

そう返したあとにふつふつと笑いが込みあがる。

「ちよ、……ははっ、ごめん、面白い」

「……面白いつて言うな大真面目なだけどっ」

「ああハイハイごめん、ありがとう」

「ハイは一回ッ」

「ハイよ。——ったく可愛いなオマエ」

ぼろつと言ってからハツと気付いた。

……俺は今なにを言った。

恐る恐るコウを見やると、デジャヴかというほどに同じ格好で力チ力チになって俯いている。

「いや、あのだから——、気にするな、とりあえず嘘は言ってない」

嘘は言ってないってなんだ俺！

「あ……その……」

もはやなんと言えいいのか分からない。かける言葉をなくして口籠もっていると、

「……分かったら食べてよ、ほら」

差し出されたのは卵焼きののる皿だ。

「あ、ああそくだよな。せっかくコウが作ったんだし」

むず痒いような微妙な空気のなか、いただきます、と手を合わせ

てそれを口に運ぶ。砂糖と塩の絶妙なバランスが舌のうえに広がった。——この一週間に何度か彼女の手料理は食べているが卵焼きを食べたのは初めてで、だから素直に感嘆の情で感想が口について出た。

「……うまい」

その瞬間にコウの顔がほっとしたように綻ぶ。それを真正面から目にして思わず京介は卵焼きの塊をそのまま飲み下した。

「っ！…ゴホッ、…う」

「え、ちよつといきなりなにむせてんの！大丈夫？」

「だ、大丈夫だ…ゴホッ。うん、で、作ってくれただけでコウは食べないのか」

豆腐とネギの味噌汁を頂きながら問う。

あー相変わらずコウ和食つくんのうまいな、しみる。

「食べるよ。…だから京介のこと待ってたんじゃん」

一人で食べるのはさみしいから、と京介には聞こえた。

「悪い、そうだよな」

「……なのになかなか起きてこないし。それで起こしにいったら…あ、あんな」

また赤くなつて俯く。

——だからあんまりそーゆー表情見せんって！……………決意が揺らぐだろ。

「…それはホント悪かった」

「べつに…」

「ご飯うまいよ。一緒に食べよう」

そう笑いかけると一拍おいてコウは箸を手取る。

ゆっくりと食べはじめる目の前の女の子を見ながら、京介は考える。

——あと3週間。3週間自分はその時の決意を覆すことなく彼女と過ごせるだろうか。

3週間たって彼女がいなくなったとき自分は何を思うだろうか。

彼女は——コウは、この生活を、自分と関わったことを良かったと思ってくれるだろうか。

色々思うことがある、そしてそのたび暴走しそうなもう一人の自分に気付かされる。

ただどお願いだから——一緒にご飯が食べられるようなこの小さな幸せを、自分自身で壊すことがないように。

「もし壊すならきつとそんな時はもう一人の自分だな」

「え、何？」

「——いや、なんでもない」

怪訝そうに眉を寄せるコウを見ながら、京介はどこかぼんやりと、この時はそう思っていた。

「いやっ、だあーかあーらあー、あたし見たんだって！」

「嘘だあ。だってさっきの選択、とってたはずなのにいなかったじゃん」

「それはだからきつとなんかまた用事があって！」

「…用事ねえ。で、それがホントだとして、アンタはなんでまたそんな興奮してるわけ」

「……う、それはあ」

京介が朝、あのあとコウを見送って昼過ぎの今学校に来ると、掲示板の前でなにやら盛り上がっている女子2人がいた。

まみとその友達で同じサークルメンバーの一ノ瀬だ。

「よお。掲示板の前でなに騒いでんだ」

「うわっ、先輩」

「深山さん。こんにちは」

前者がまみ、後者が一ノ瀬で、京介はなんの気なしに尋ねる。

「べつにそこまで驚かなくていいだろうが。で、なに騒いでんだ？」
「あー…えっと」

どちらかというと落ち着きがある方の一ノ瀬が答えようとして、しかしちら、とまみに視線を送る。

「私めんどくさいので。まみ、深山さんに説明してよ」

「はっ！？いきなりなんで」

「いいじゃんべつに。イヤなの？」

「や、いやとか…そんなんじゃないけど」

「じゃあお願いね」

私次の講義の席取りしてくるね！と一ノ瀬はさっさといなくなっ
てしまった。

まみと共に残された京介はなんとなくバツが悪い。

「なんか悪いな、どーでもいいことで引き止める感じになって」

「や、全然いつすよ。…そつ、そーいえば先輩つ、こないだのハン
バーガーは食べたんですか？」

こないだのハンバーガー、と言われて、一瞬は何のことだった
かと考えをめぐらす。

「あ…あー、あれか。うん、食った、うまかった」

コウに会いに行ったときのことだ。そういえばこの後輩にはそん
な言い訳をしてサークル室を出てきたのだと思ひ出す。

他人にその口実の部分を真つ向から切り込まれるといやに恥ずか
しくて、京介は自分の顔が赤くなつてないかと不安になった。

「…なんですかその顔。行った先でなんか嬉しいことでもあったん
すか」

「…い、いや、別に何も。てか俺より今はなんでおまえらが騒いで
たのかっていう理由言うところじゃなかったのかよ！」

そうとつさに噛み付くと、まみはつままないのと口を尖らせた。

「うちらはべつに…それこそ先輩にとつちやどうでもいいことす
よ。———うちらの学年に、ここしばらく学校来てなかった子がい
たんですけど」

「……で？」

「あたし、その子——イズミ、っていうんですけど、イズミのと今朝見た気がして。でも一ノ瀬がいるわけないって言うから……」
その内容に、いつだったかのサークル室でのまみと一ノ瀬の会話を思い出す。

「あー……おまえらもしかしてその子の話、前サークル来たときも話してたことなかったか。たしか頭いいとかなんとか」

「そう！そうなんですよ。イズミほんと頭よくて。もしやめちゃうならもったいないねって話してたんすけど……」

あたしがなんでムキになってたかっていうと、とまみは続ける。

「あたし、入学したときからずっとイズミと友達になりたいなって思ってた。だから学校きたんだったら話せたらいいのって思ってたから」

「なるほどな」

そんなことを思われているイズミとやはは幸せ者だ。学校に出てきたら迎えてくれるひとがいる。——それはなんて幸せなことなのだろう、と京介は思う。

今日久しぶりに学校にいったコウにも、そんな人がいたらいい。

「……先輩？なんか違うこと考えてます？」

「ああいや……」

しばしまみを見つめてぼん、と頭を叩く。

「おまえのそういう部分に救われてる奴きつといっぱいいるよ。そのイズミって子とも友達になれるよう、応援してる。がんばれ」

笑って言うともみは一瞬で赤くなり、

「あ、あたりまえっすよ！見ててくださいね！放課後サークルに報告に行きますからっ」

そのままダッシュでいなくなる。

——ってことはあれか。俺は今日の放課後必ずサークル行かないやなんないのか。

思わず失笑。でもまあどうせ今日は午後からラストまで講義が入

つてるのだから、それも悪くないと思った。

首尾よく講義も終わりサークル室にいと、ドタドタ……という足音のあと、ボタン！と勢いよく扉が開く。

「せんぱーいっ」

「おまえ…もうちょっと静かに入ってこれないのか」

「だって嬉しくてっ」

「なにがだ」

「昼に言ってたことですよ！あたし——例の子、イズミと交流できました！」

「へー、よかつたじゃん。で、どうなった？」

「それが聞いてください！あたしが入ってるサークルの話したら、実はイズミも読書好きらしくて！入りたいって言うもんだから連れてきちゃいましたっ」

展開はえーなオイ。と思うが仲間が増えることは一向に構わないので、イズミこっち！と廊下にいるであろうその子を手招きしている後輩を見守る。

「ふっふーん、先輩、イズミが可愛いからって驚かないでくださいね」

「なんだそりゃ」

「じゃーん！あたしの新しいお友達、イズミコウちゃんでーすっ」

——その時、正直いって京介はこれ以上物事に対して面白い反

応がとれなかったことはないと思う。

「……ドウモ。イズミコウです」

そう言っただけで目の前に現れたのは、紛れもなくここ一週間生活をと
もにしているコウその人だったからだ。

第21話 三度目の出会い&1t;前>;(後書き)

今回もお読みいただきありがとうございました。

面白いあとがきを目指す、とか言って3日坊主にさえならなかったのはええ、私です。

それはそうと↑

最近本格的に自分のサイト持とうかなあとか目論んでいますので、その時にはどうぞよろしく願います。
いえ、実現するかわかりませんが。

第22話 三度目の出会い & 1 t ; 後 & g t ;

——正直言ってつまらないものを見た、なんて思っていない。ついそんなことない！と反駁はんぱくしそうになった程には。

家主である京介より先に家を出たコウは、大学に向かいながら道中今さっきの出来事を思い浮かべる。

張り切って朝ごはんを作って、いつもなら京介が起きてくる時間に間に合うよう全部セッティングもした。

しかし肝心の京介がいつもの時間に起きてこない。不思議に思つて（一人で食べるのは淋しくて仕方なくて）、トタトタと京介の部屋まで向かった。

コウ的にはまだ寝ている京介を、優しく揺すって起こすような——そんなイメージでいたのだ。

しかしどうしたことが。京介はもう起きているししかも裸だしで、驚きと羞恥——それから少し見惚れて動きが止まった。

奇声を上げた京介も京介だと思ふ。もっと平然としてくれればあたしだってあそこまで硬直しなかったのに、等と見当違いな八つ当たりをしてしまう。

コウは冬だというのに寒空の中顔が熱くなるのを自覚する。

——引き締まっていたなあ……ってあたし今何を。

コウには分からない。部活や運動系のサークルに所属している気配はないのに、京介がなぜ運動している人のような体つきなのか。

なんか高校まで運動部だったのかな。…今は何かやってるの？

彼に関する疑問は沢山あって、けれどその全部を聞く気はない。

どうせ離れてしまうのが分かっているのに——それが今からこんなに辛いのに、相手のことを深く知るなんてことは余計辛いと分かり切っている。

ふう、とため息をついて回想を終了する。

……京介のアホ。

たいした意味もなく悪態をつきながら、コウは順調に大学に向かって歩を進めるのだった。

久しぶりに来た学校でコウを待ち構えていたのは、級友たちの純粹に物珍しそうな視線だった。挨拶程度に久しぶり、元気だった？などのテンプレートな会話はするものの、それ以上の絡みはない。その方が向こうもこちらもやりやすい。

変に好奇めいた視線でないのはさすが高校を卒業して、皆精神的にも大人に向かっているということだろうか。

——元々集団の中でも一人でいるのが苦ではなかったコウは、知り合いはいても深い友達がいない。べつに人が嫌いとか煩わしいとかそういうことではなく、できたらでいいいいないないないでもない特に困らなかつたからだ。

だけどそれを今は後悔している。京介と出会って人の温かさを知った今——勿体ないことをしていたと思えてならない。

とりあえずは復学届けを提出しに行つて、それから時間割を確認し予定の講義室に向かう。

友達はおいおい作っていくつもりで、とりあえず今日は一人で座るつもりでいた。

だから後ろから肩を叩かれて声をかけられた時には、相当びっくりしたと言えるだろう。

「……………い、和泉サンッ」
「っ！」

びつくー、と肩があがったのを自覚した。

「…は、はい。何？」

名前以上に久しぶりに呼ばれる苗字に目を丸くして振り返れば、
当のコウよりも緊張した面持ちで立っている、顔見知りの級友がそこにいた。

「うわっ、やばいマジで可愛いーノ瀬どーしよう緊張する」

その彼女は一步下がった場所にいる友達にそうもらすと、あたし
やっぱ無理だよー！などと半泣き状態で縋りつく。

「バカ。せつかくあんたの大好きな深山さんに勇気づけてもらった
んだから頑張りなつて。それとも今日の放課後手ぶらでサークル室
行くつもり？」

……………ミヤマサン？勇気づけてもらった？

自分の目の前で繰り広げられるやりとりにコウはただ目を瞬かせ
るしかない。

「あの、」

「ほらまみ、和泉困ってるよ。声かけといて放置プレイって何よ。
下手なナンパなみにタチ悪いわよ」

「うううう…てゆーかさらっと大好きなとか言うなあ…」

「ふん、今さら…ほら早く」

ぐいつと押されて結局前に進み出てきた級友——まみは、一瞬
間を空けて意を決したように高らかにこう述べた。

「…い、和泉…サン。あたしと——あたしと付き合って下さいッ
！！」

その時教室の空気が固まった。

直後――、

「友達になって下さい、でしようがこの馬鹿！」

スパン、という小気味よい頭をはたく音ともに、一ノ瀬の訂正、
もとい突っ込みが入ったのは言うまでもない。

「うう…間違った」

二人の様子に静まり返った教室が元の空気に戻っていく。

「ふ、」

コウも思わず笑いが漏れた。

あ、笑っちゃった――気を悪くしただろうか、などと考える前に相手の食い付きが凄かった。

「笑ったあ！一ノ瀬、和泉が笑ったよ！？」

「ああうん…私も見てるから。いやーびっくりした。和泉さ」

「な…なに？」

ほとんど初めて話したといっても過言ではない級友にいきなり話を振られて、少しばかり腰が引ける。

そのことは見越されているのか一ノ瀬はふわつと笑った。

「べつに取って食おうってわけじゃないよ。ただ、和泉が出てこなくなる夏休み前まで見てた感じでも無表情なイメージあったから。いつも今みたいに素の感情出せば可愛さにさらに磨きがかかるのかなと思って」

「えっ」

言われたことのない言葉に顔を赤くする。

「あ、まさにそんなかんじ。いいじゃん可愛い、ね、まみ」

水を向けられたまみは何故かぶうたれ顔だ。

「あたしが…声かけたのに。なんであんたが先に和泉と仲良くなつてんの！？」

「だってまみ遅いんだもん。羨ましい？」

へへん、と言って一ノ瀬は座っているコウの頭を抱きかかえる。
「わっ」

「うつうつ……ずるい」

まみは唸るがコウの方はひたすらされるがままだ。…けれど心はどこかあたたかい。

「ま、とゆーことだから和泉」

「…？」

「よろしくね、これから」

「ずるっ！あたしも、あたしもよろしくね、和泉っ」

「えっと…」

それは…。

「今から友達…ってのはだめっすか？やっぱいきなりうざい？」

さつきからまみと呼ばれている方がどこかおっかなびっくりそう聞いた。

……………だめかなんてそんなの。

「だめなわけない…」

嬉しい。

そう答えた声は震えていないだろうか。——うつむいた目から涙が零れそうなことはばれていないだろうか。

そんなコウの思いとは裏腹に「和泉意外と直情型だー」なんて優しく笑いながら背中を撫でる2つの手に、泣きそうなことなんてもうとつくにばれている気がした。

それから放課後までの講義の合間、いろんなことを聞いた。二人の名前も、なんでコウに声をかけたのかも。

——実はあたしね、入学式で和泉と一回話してんだよね。和泉覚えてないだろうけど……あたし、講堂でカバンの中身ぶちまけちゃって。それ拾ってくれたんだよ。あ、他にも拾うの手伝ってくれた子はいたんだけど……あたし……和泉がすごいタイプで……！！ありがとう、って言ったらいえ、って和泉一言だけ！クールビューティーならぬクールキューティーだあとか思っちゃって！あ、ちよつと怪訝な目しないで。一ノ瀬、叩かないでよ痛いッ。そーそー、こいつは中学同じで大学で偶然再会したんだよね。うるさい、いいもん一ノ瀬はこいつで。……あ、はいごめんなさい。で、うん、その後ずっと和泉と話す機会窺ってたんだけど……逃してるうちに夏休みに入っちゃって、そんで更に和泉学校やめるとか噂で聞いてさあ。ああもう会えないのかなあって思ってたなら、今朝になつて和泉発見して！嬉しくて声かけちゃった。

とは、まみの談。

——そうは言ってるけどね、和泉。まみはほとんど憧れの先輩の応援があつたから声かけられたようなもんだよ。ほら、さつきも言つてた深山さん。サークルの先輩なんだけどね、まみはその人のことが、

今度は一ノ瀬がそこまで言つと、まみが待ったをかけた。

「ちょおおおおと一ノ瀬さん！？それはべつに今言わなくていいんじゃないのかなあ！？」

「え、なんでいいじゃん恋バナ。和泉だつて知りたいよねえ？」

——講義が終わつた後の教室で友達と恋の話。それは凄く友達っぽくてワクワクした。

「うん。聞きたい。……あ、まみちゃんが嫌ならいいけど」

精一杯そう答えれば、

「いやんまみちゃんトカツ。やーもう、和泉になら何でも教えちゃう」

「まみデレすぎててキモいんだけど」

一ノ瀬の突っ込みをもっともせず、まみは話し始める。

「深山先輩はね、まあ今までの話の通りサークルの先輩なんだけど……なんていうか、まだ好きっていうより憧れなんだよね。……一ノ瀬も、そこそこよろしく。それでその先輩に今朝会った時に友達になりたい子がいる——って和泉のことねこれ」

まみはコウを見て照れたように笑う。

「まあ、その話したら頑張れって応援してくれて。……深山先輩って、どんな話も黙って聞いてくれるからそこを凄い尊敬してんの」
相づちをして聞きながら、その人のイメージに京介が被る。

コウも京介にたくさん話を聞いてもらった。あれがあって今の自分がここにいます。

「分かる……話聞いてもらえるのは嬉しい」

思い浮かぶのは函館山やホテルでの、全部を受けとめてくれるような優しく真摯な表情の京介だ。思い出したら無性に会いたくなつて、けれどここでは会えない事実にがっかりする。

「そんでね、今日……ってか放課後だから今か。成果を深山先輩まで報告するって約束してるんだけど、和泉一緒にサークル室来ない？」
「へっ」

突然の提案に思わず素っ頓狂な声が出た。

「あたし、その例の先輩に別れ際に見ててくださいよっつって飛び出してきちゃったんだよね。だから、行かない？」

本人つれてくのが一番手っ取り早いかと思つてさ。

まみはそう言つてからと笑う。コウとしては今日はバイトもないし断る理由も存在しない。

「……べつに構わない……けど、それって何サークルなの」

「あ、そこ聞くんた」

途中から黙つて成り行きを見ていた一ノ瀬が突っ込んだ。

「……気になったから」

「まあそりゃそうだ」

「あれ、あたし言っでなかったつけ？んーとね、読書好きな人が集まる『love本サークル』っていうんだけど」

次に答えたまみの声に返せたのは沈黙だ。

「……………」

「あ、やつばそういう反応。だよなー。でもあたしこのダサすぎる名前に逆にツボつかれちゃってさ。和泉読書は…」

「好き」

それは自信を持って言えた。

「即答だ！まーでも見るからに好きそうだよね和泉は」

二人の会話に、横で笑う一ノ瀬はじゃ、行こうかと席から立ち上がる。

二人も倣って立ち上がった。

「あの、実際その先輩に会う前に聞いておきたいことがあるんだけど」

歩き始めたまみに向かって、後を着いていきながらコウは声をかける。

「うん、何？」

「あの…その人のフルネームは？」

一瞬きよんとした彼女に慌てて言葉を続ける。

「あの…あたし自身、本すきでサークルそのものに興味があるから、だったら先輩になるその人の名前もちゃんと知つときたいなって、それに…」

ここ最近でこんなに京介以外の人と——学校の人と喋ったのは初めてだ。

これから言おうとしてることは間違っていないだろうか。緊張で鼓動が速くなる。

「友達の大事な先輩に…ちゃんと挨拶、したいから」

一瞬の沈黙のあと、横にいた一ノ瀬からは頭をわしゃわしゃされて、前にいたまみからはUターンした末に抱きつかれた。

『和泉可愛い…』

ユニゾンに頬が熱くなる。…妹扱いされている感も否めないが。
「おつとこうしちやおれん。早く行かなきゃ先輩のことだから帰っちゃうかも。名前はね…」

そうして告げられた名前にコウは息を呑んだ。無心では聞けない名前だった。どうか自分の知っているその人と別人であれと願いながら——着いた先にいた例の先輩は、紛うことなき京介その人だった。

廊下に聞こえた声で京介だと分かってしまったその人とまみの会話を聞きつつ、サークルに入りたいとは明言してないんだけどなと思ったが、そんな思いは自己紹介をする為に些末な問題として消え去った。

その自己紹介がカタコトになってしまったのは許してほしいところ、だろう。

第22話 三度目の出会い&1t;後>;(後書き)

こんにちは。なんだかアレですね…………女子3人揃うとつるせえるせえ(笑)

まみ喋り過ぎだろ！調子のんな、って頭はたきたくなりますね…！
ノ瀬の気持ちがすごいよくわかる。

でもまみがいると話が勝手に動いてくれるので助かり…助かってるのか？笑

好き勝手やってくれるせいでだいぶ当初と違う展開にもなってますが基本的にキャラに任せてるのでそれもまた一興ということでは…。

今回もお読み頂きありがとうございました。

次回もはやい内にお会いできるよう頑張りたいと思います^^

第23話 ウソとホント

「えっと…二人もしかして知り合いなの？」

サークル室で出会ったコウと京介、その両者の反応を見て、こんな時だけ聡いまみは微妙な表情をして尋ねた。コウはその表情を見てハッとする。

—— あ、まみちゃん……そっか。あたし、この質問になんて答えればいいんだろう。

知り合いか。そう聞かれてそうだと言うことは容易い。けれどその一言で京介との関係を片付けたくないという感情がコウの中にはあって、思わず口籠もった。なにより、さっきの話で彼女の京介に対する気持ちも知ってしまったから、余計にどう答えたらいいのか分からない。

そこに助け船を出したのは京介本人だった。

「友達になりたいやつ、ってコウのことだったのか」

まみに向かって尋ねる。「あ、はい…」

京介には一見して驚いた様子はない。

…なんで京介そんな平然としてられんの。

一人だけ動揺して自己紹介がカタコトになってしまったことが、妙に悔しい。

「びつくりした。まさかコウが来るなんて」

「い、和泉と先輩はどこで知り合ったんすか？」

意を決したようにまみが聞く。

「どこでって…」

京介と目が合った。アイコンタクトで『言っていいのか？』と尋ねられている気がするが、答えに窮する。まみたちに知られるのがいやだ、というわけではない。自分の中では母のことも区切りがつき始めている。ただ——自分と京介しか知らない出来事が第三者に広まるのが嫌だった。

『…わかった』

京介の口がそう動いた気がした。

そしてそのまままみと一ノ瀬に向き直る。

「知り合ってたっていうかな」

えっ、なに、なにが分かったの。てか京介何言うつつもり！

「——従兄弟なんだ、俺とコウ。そこでこいつ今俺んちに下宿中」

『えー！』

「え」

まみと一ノ瀬が驚愕するのに続いてコウも小さく声が出た。馬鹿あたし！

慌ててぱたつと口を手で押さえる。

「まあ驚くよな。…ちよつと事情あってコウが一人暮らしすることになって、だったら俺んちに来ればって。姉もちょうどいなくなつたから、シエアっぽくなつたほうがお互い家賃も安いし。大学が俺の家から通える距離だったのは知ってたけど同じ大学ってのはコウ教えてくんなかったから分かんなかった。オマエ、言えよ」

すらすらと並べ立てられる嘘設定に舌を巻く。しかも所々事実なのが妙に真実味を帯びさせていて、従兄弟という距離感を出すために小芝居まで振られたことが分かる。

——ノったほうが、いいのだろうか。

「そ、そんなこと言ってたって京介聞かなかったじゃん。あたし悪くないもん」

「べつに悪いとは言っていない。つかオマエ、今朝弁当忘れていったら、自分で作ったくせに」

これは事実だ。

「……気づいてたなら持つてきてよね」

「はあ！？無茶言っな、同じ学校だって知ったのついさっきだぞ」

「うっ……。京介の分まで作らなきゃよかった」

「なぜそうなる！はつきり言って助かったしうまかった、明日からもお願いしたいくらいだ」

「……………あつそう」

「今のそういう返事する流れじゃなかったよな!？」

「うるさいツツコミ狂」

「こいつ……。悪かったなツツコミ気質で」

途中から完全にふつうのやりとりになっていた。ハッと気づいて京介に返事するのをやめると、そのやりとりを傍観していた二人が口を開く。

「な、なんだほんとに従兄弟なの? いや、びっくりした、ね、一ノ瀬」

どうやら一応それっぽくは見えたらしい。

「うん…あ、じゃあ二人今から帰る場所一緒なんだ」

一ノ瀬に不思議そうに言われてコウも気づく。ああそうか…帰る場所、一緒なんだ。

その事実のコウの心を無性にあつたかくさせた。けれど同時にまみが何を考えているのかが気にかかる。やっとできた友達。京介のことを懂れたとは言っていたけれど――。

「いいなあ和泉、先輩と家一緒なんて! 過去問とかもらいほーだい……あ、でも和泉ならべつに先輩ごときに過去問とかペンキョー教えてもらわなくても試験とか楽勝かー」

あははと笑いながら、まみはそんなことを言い放った。……なぜかほっとした。

「ごときつてオイ。つかオマエの中で俺はどれだけ過去問担当者なんだ、過去問にしか頭いかないのか」

「そ、そんなこと…! そもそもなんで学年だって離れてる先輩から過去問借りてると、」

「ああ、そういえばそうだよな。なんでだ? 2年から借りたほうがいいんじゃないの、オマエ」

「え」

「今度からそうすれば?」

「え、……いや、です」

「なんで」

……「うう」

コウには理由が分かる。そしてきつと一ノ瀬にも。更にそれは絶対気軽に言える理由ではないことも。

「？」

「だって——先輩の過去問丁寧なんだもん！！」

「……はあ？」

丁寧だから？

京介が口に出して聞き返した言葉はまみの本心ではないだろう。けれどコウはまみが出した答えにまたほっとした。同時にそんな自分が嫌になる——あたし、性格悪い。

「うん、そう！そうなんです！先輩ってちゃんとドコ出て出なかったかとか、書き残してくれますよね。それが助かるんです、私過去問ないと留年決定ですから。過去問バンザイ！先輩には頼りきりです」

「……そこ胸張って言うトコじゃねえぞ？」

「う、うるさいな！喜んで下さい、あたしがいることで先輩の存在意義がですね、」

「俺はそんなレベルなのか！はいはい、もう分かったから今日帰っていいか」

帰るぞコウ、と京介の視線が自分に帰ってくる。自分とよりよほどテンポよく進む会話と自己嫌悪の感情を前に、ぼーっとしていたからか返事がとっさにできなかった。

「あ……うん」

「ふんだ、深山先輩なんて！和泉、また明日ね！明日も学校来てね！」

まみが腕にがっしりしがみ付きながら京介にべー、と舌を出す。

「おい……」

「……もちろん。一ノ瀬さんも、また明日」

最初から最後まで傍観者だった一ノ瀬に挨拶すると、彼女は笑って手をひらひらとさせた。

賑やかなまみと落ち着いている一ノ瀬に見送られて、二人でサークル室を後にする。廊下を歩くコウの胸中は、初めてだらけの感情で複雑だった。

京介とコウがいなくなったサークル室は静かだった。見送って戸口に立ったまままみは動かない。

「まみ」

一ノ瀬の呼びかけに振り返らずに返事する。

「一ノ瀬、あたし、ふつうのあたしだった？」

「ん、いつも通りアホな後輩だった」

「はは、なにそれ。あたし…おかしいな、一ノ瀬。なんか目から水が…」

目が熱い。そう思ったときにはいつの間にか涙が落ちていた。俯いているからか、床にぱたぱたと小さな水溜まりができる。

嗚咽を堪えていると、ふわっと後ろから一ノ瀬に抱き締められた。

「一ノ瀬…。あたし先輩のこと、ただの憧れじゃなかったのかな。なんかすっごい痛い」

「ん」

「……好きなんだ。深山先輩のこと」

「ん、知ってる」

「今ね、先輩ここ出てくときに、和泉にはばれないようにあたしに小さい声でありがとなって言っただけ。はじめから——」

はじめから、朝の励ましやがんばれよと言って頭に手を置いてくれた優しさは、自分に向けられたものではなかったのだ。

今朝に見せてくれた優しさの先にはきつとコウがいた。京介はその時点では同じ人物だと知らなかった彼女のことを、まみが話す『友達になりたい子』とダブらせていた。

そしてコウにも友達ができたらしいと——だからまみに『ありがとう』なのだ。

「一ノ瀬くどうしょく思ってたより痛いよ」だって従兄弟は結婚もできるんだよ」しかも一緒に住んでるとかフラグ立ちまくりじゃん」お互い名前呼びだし」でも和泉とだってもっと仲良くなるんだからあ」

泣きながら本音を垂れ流すまみはある種可愛い。一ノ瀬は思わず笑う。

「まみはそういうのがいいとこだよね。悩みはもちろんあるけど、なんかそれすら明るく悩むっていうか」

「……だって、本音なんだもん」

「うん。そうだよ。先輩も好きだけど、あんた和泉のことも大好きだもんね」

「うん」

一ノ瀬が腕を解いてまみの頭を撫でる。

「あしたからまたがんばろ」

「……うん」

「自覚やつとできてこれから勝負だなあ」

「……うん」 「まずは過去問せびる後輩カテゴリーから抜け出そうか」

「……うるさい」

「あ、今なら素直にうんって言うかと思ったのに」

「……過去問借りるのは、確かに接点持ったための口実だけど実際に切

実な問題でもあるから話がべつ」

「はいはい」

返事してから一ノ瀬もまみもなんとなく笑いだして、空気が和らいだ。

「———ありがとう、一ノ瀬」

「ん、じゃお礼に今からパフェ奢って」

「またあ！？あんったホント好きだねパフェ」

「いいじゃん。さ、行こ」

ぐちぐち言いながらまみは目的地に向かって歩き始める。

文句は言いながらも、気分はどこか晴れやかだった。

「……あたし、あんたの従兄弟だったんだ」

「……………」「なんであんな嘘ついたの？」

「……………」

「ねえ、京介ってば」

「……………」

「———聞けッ、あほ！」

「うおっ？」

家までの道を歩いている途中、ガツン、とすごい衝撃で腿の後ろ辺りにキックが入った。かなり痛い。

「コウ、おまつ……。前にも足だすのは止めろって言わなかったか」

「知らない。聞いてない。心の中で言っただけなんじゃないの」

…はてそうだったか。思い出そうとして、どちらでもいいと思い直した。

「従兄弟って言ったのは、赤の他人同士で同じ家に住んでるのは普通じゃないからだ。変に勘ぐられるのはめんどくさい」

恋人同士ならいいけどな。というのは、思っても口に出さない。

「だったら一緒に住んでるっていうのを秘密にしとけば、」

「言うと思った。考えて見ろ、同じ大学で同じサークル、共通の知り合いがいたらそれを隠し通すのは不可能だ。今ならまだいいけど

——コウはこれから先、きっとあいつらともっと仲良くなるだろう。そしたら、」

自分はまだいい。男側だし、知られて困ることなんてほばない。でもコウは。

「……そうしたら、オマエが困る事態になるだろ。女の子同士でそういう重大な秘密があとから露見されるってのはよくは分かんないけどまずいんじゃないのか。だったら、初めから一緒に住んでるってのをバラした方がいいと思ったんだよ」

従兄弟なら同じ学校にいてほとんど他人とかよくあるし……。とつてつけたように言つて、その後にあと3週間もすればコウは出ていくのだと思い出した。これじゃあまるでずっと一緒にいるかのような。

…いかに自分がコウと一緒にいれることを疑わずに過ごしているか知れて、自分自身にため息を吐いた。

コウからの反応がない。声をかけようとして横顔に振り返れば、ぎゅっと左の袖が握り締められた。

「コウ、」

のぞき見た横顔は、今までも何度か見てきた泣きそうで、でも唇を噛みしめることでそれを我慢してるような表情だった。

店の駐車場で絡まれているのを助けた時。自分に函館に一緒に来てと言ったとき。——初めてコウの名前を呼んだとき。

感情が揺れたときに見せる顔だというのはもう知っている。

「……………」

自分が彼女に何を言おうとしていたのかもう思い出せない。その表情に戸惑うような朱色がささっているのを見て何も言えなくなつた。

何かしてしまいたいほど凶悪にかわいいと思えるその表情を、この先誰にも知られたくないと思った。

「なあコウおまえ、」

ずっとこの家にいる気はないか。

そんな台詞が思い浮かんで音にならずに飲み込んだ。

——馬鹿か俺は。

結局頭を一度撫でただけでいつの間にか止まっていた足をまた動かし始めた。

「ごめん、何でもない」

「……………」

終始黙つたままのコウは一瞬だけ首をかしげて不思議そうにしてみせた。

それには笑つて返事をしておいた。

——その日の晩ご飯は、蹴つたことへの謝罪と共にコウが作ってくれた。例によつておいしい和食だった。

蹴りが出たことに対して謝罪があつたのつて実は始めてなんじゃないかとか割とどうでもいい感想を抱きながら、その日の手料理も完食したのは言うまでもない。

第23話 ウソとホント（後書き）

今回も読んでくれた方々ありがとうございます！

最近感想書いてくれる方がなんだか増えてヤル気ボルテージが半端ない私です（笑）

ところで偶然にも、最近私も初めて行ったお店でパフェ食べたんですが、半分食べたか食べないかで断念しました…やっぱり自分はしよっぱいものが好きだ！！元祖津軽人なめんなコラ！！と。

あ、ちなみに余したパフェ達は友人たちのお腹に消えましたよ。限界来るまではおいしくいただきました キラッ

雰囲気よかったからまた行きたい（´、`）

そんなわけでぼちぼちあつちの幼なじみたちもそろそろ進展させねばなあ…と思ってます。

かみんぐすーんとか言ってがんばってみますヨ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8553i/>

24時間営業中！

2011年9月17日12時16分発行